

平成 28 年度

講義要項

経営学研究科経営学専攻

博士後期課程

埼玉学園大学

目次

経営学特講 (文 智彦)	1
経営学特講 (大江清一)	2
経営組織論特講 (西山賢一)	3
ヘルスケアサービス・マネジメント特講 (一戸真子)	4
地域企業論特講 (加藤秀雄)	5
国際経営特論 (菟田文男)	6
経営史特講 (大東英祐)	7
経営史特講 (張 英莉)	8
経営財務特講 (箕輪徳二)	9
IRと企業情報特講 (米山徹幸)	10
マーケティング特講 (白鳥和彦)	11
労務管理特講 (岩出 博)	12
財務会計特講 (濱本道正)	13
管理会計特講 (成松恭平)	14
国際会計特講 (李 相和)	15
国際会計特講 (近田典行)	16
租税法特講 (望月文夫)	17
貨幣論特講 (奥山忠信)	18
金融論特講 (芳賀健一)	19
国際金融論特講 (相沢幸悦)	20
国際金融論特講 (本澤 実)	21
リスク・マネジメント特講 (冨家友道)	22
現代ファイナンス特講 (関村正悟)	23
格付評価特講 (黒沢義孝)	24
ABS(社組債)・金融機関格付評価特講 (江川由紀雄・根本直子)	25
民間企業・ソブリン格付評価特講 (森田隆大)	26
特別研究指導 I	
箕輪徳二	27
大東英祐	28
黒沢義孝	29
西山賢一	30
濱本道正	31
米山徹幸	32
菟田文男	33
奥山忠信	34
相沢幸悦	35
加藤秀雄	36
望月文夫	37
一戸真子	38
特別研究指導 II	
箕輪徳二	39
大東英祐	40
黒沢義孝	41
西山賢一	42
濱本道正	43
米山徹幸	44
菟田文男	45
奥山忠信	46
相沢幸悦	47
加藤秀雄	48
望月文夫	49
一戸真子	50
特別研究指導 III	
箕輪徳二	51
大東英祐	52
黒沢義孝	53
西山賢一	54
濱本道正	55
米山徹幸	56
菟田文男	57
奥山忠信	58
相沢幸悦	59
加藤秀雄	60
望月文夫	61
一戸真子	62

授業概要

本講義では、企業経営の根幹である経営戦略について、体系的に理論を理解し、かつ批判的視点から理論の考察をできる研究者としての高度な知識を習得することを目的とする。

経営戦略とは、企業の長期的な存続・発展のための方針である。このような経営戦略の諸理論について、事例を分析しながら、その意義と課題について講義する。さらに経営戦略の策定と実行に関わる戦略的意思決定プロセスに関する諸研究を講義する。

授業計画

第1回	ガイダンスー講義計画・講義方法・到達目標・学術文献などの紹介
第2回	経営戦略とはー経営戦略の定義と特質、重要性
第3回	企業戦略ー事業の選択と資源配分およびその事例分析
第4回	企業戦略ー事業システム戦略およびその事例分析
第5回	競争戦略ー競争優位の戦略およびその事例分析
第6回	競争戦略ー競争地位別戦略およびその事例分析
第7回	戦略的意思決定プロセスの諸モデル
第8回	戦略的意思決定プロセスに関する事例研究における二分法
第9回	戦略的意思決定プロセスに関する理論研究における二分法
第10回	戦略的意思決定プロセス研究におけるコンティンジェンシーアプローチ
第11回	戦略的意思決定プロセス研究における戦略的選択アプローチ
第12回	戦略的意思決定プロセス研究における社会的相互作用アプローチ
第13回	戦略的意思決定プロセス研究におけるアクティビティ・ベースト・アプローチ
第14回	経営戦略の事例分析①
第15回	経営戦略の事例分析②
第16回	定期試験

到達目標

経営戦略の理論について批判的視点から体系的に理解し、博士論文作成のための独創的な視点を養う。

理論に基づき事例を分析し戦略の策定と実行に関する具体的な構想を提示できる能力を習得する。

履修上の注意及び予習・復習

講義には、教員が指定する学術文献を熟読して参加すること

受講者による発表を適宜行ない全員で議論するので、その準備をして参加すること

評価方法

課題や議論への取り組みと定期試験によって評価する。

テキスト

講義中、適宜指示する。

授業概要

経営学特講では、組織理論と企業経営の現実を比較することによって、経営学の古典的著作である『経営者の役割』で提示された、C・I・バーナードの理論を検証する。バーナード理論は経営学に加えて心理学、社会学等、多方面から考察を加えて構築されたものであり、経営の現実との比較によって理論内容の理解が深まれば、経営学研究において独自性を打ち出す上で一つの拠り所になると考える。

授業計画

第1回	ガイダンス - 講義計画 - 個人と組織について
第2回	協働体系の検討:制約
第3回	協働体系の検討:要因
第4回	協働行為の諸原則
第5回	公式組織の定義
第6回	公式組織の理論
第7回	複合公式組織の構造
第8回	非公式組織とは
第9回	専門化の基礎と種類
第10回	誘因の経済
第11回	権威の理論
第12回	意思決定の環境
第13回	機会主義の理論
第14回	管理職能と管理過程
第15回	管理責任の性質

履修上の注意

テキストは『経営者の役割』を用い、履修者が担当箇所を順番にレポートする形式で演習を進める。発表後テーマに沿って議論を行う。履修者は担当箇所の要約にとどまらず、関連する経営実務、実例等を引用し、理論との比較結果を発表することが望まれる。

評価方法

担当するテーマに関する発表内容、準備状況、議論への参画度等、演習に対する取り組み度合いによって評価する。

テキスト

C・I・バーナード著、山本安次郎他訳『新訳 経営者の役割』(ダイヤモンド社、2004年)。

授業概要

本授業では、修士課程における研究で習得した知識を発展させ、博士論文の作成に必要な水準の理論の習得と、経営組織に関する認識を深化させることを目標とする。特に知識社会化と情報通信化の進展で、専門知識を深めながら他分野と連携できる力量や、分業を担いながら協業の全体を概観できる能力など、経営組織の現場で総合的な能力が求められていることに注目して、主としてこうした視点に立った、経営科学とその周辺分野での代表的な文献を受講生に割り当て、手分けして紹介しあいながら、新しい時代の経営組織像をめぐって講義する。

授業計画

第1回	講義に関するガイダンス
第2回	進化する経営組織と仕事
第3回	組織の中の個人（1）経営組織の場での分散認知
第4回	組織の中の個人（2）経営組織の場での状況認知
第5回	複雑系としての経営組織
第6回	実践共同体としての経営組織
第7回	経営組織における正統的周辺参加
第8回	拡張的学習の場としての経営組織
第9回	協働と連携を支える専門知識（Expertise）とは何か
第10回	メタ組織（Knotworking）の登場
第11回	経営組織の文化的透明性とブラックボックス化
第12回	経営組織とコミュニケーション（1）コードモデルと推論モデル
第13回	経営組織とコミュニケーション（2）言語ゲームと意味の交渉
第14回	多声性の場としての経営組織
第15回	21世紀の経営組織のありかた
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、組織の経済学に関して、修士課程における研究で習得した知識を発展させ、博士論文の作成に必要な水準の理論の習得と、組織の現場に関する認識を深化させることを目標とする。また博士論文の作成に必要な分析力の習得を目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

授業中に取り扱う研究論文と原典について、十分な予習を行うこと。また授業中に課題を指定するので、積極的に取り組むこと。

評価方法

授業および課題への取り組みと定期試験によって評価する。

テキスト

授業中に適宜、関連文献を紹介する。

授業概要

本講義では、修士課程において習得した専門知識を更に発展させ、グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント理論の構築についての講義を行う。特に、急速に展開するヘルスケアサービスに関するグローバル化について講義する。どの国がどのようなヘルスケアサービス問題を抱えているか、日本はどのような点が優れているか、各国の取り組みを総合して望ましいヘルスケアサービス・マネジメントはどうあるべきかについて理解を深める。ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の動向についても講義する。

授業計画

第1回	講義についてのガイダンス
第2回	グローバルな視点からみたヘルスケアサービス・マネジメント
第3回	ベストプラクティス/パフォーマンスとマネジメント
第4回	ヘルスケア・コンシューマー・オリエンティッド
第5回	WHO、OECD、The World Bank の役割
第6回	JICA、Bill & Melinda Gates Foundation の役割
第7回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント①：アメリカ
第8回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント②：イギリス
第9回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント③：ドイツ
第10回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント④：北欧諸国
第11回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント⑤：中国
第12回	グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメント⑥：その他のアジア諸国
第13回	Policy、System、Universal Standards
第14回	Quality、Safety、Efficiency、Accessibility
第15回	まとめ UHC（Universal Health Coverage）
第16回	定期試験

到達目標

以下の各内容を習得することを到達目標とする。

- ① グローバル・ヘルスケアサービス・マネジメントの基本的視点が理解できる。
- ② 各機関の役割やアプローチが理解できる。
- ③ わが国のヘルスケアサービス・マネジメントの現状を客観的に分析できる。
- ④ ユニバーサル・ヘルスカヴァレッジ（UHC）について理解を深める。
- ⑤ 望ましいヘルスケアサービス・マネジメント理論の構築を試みる。

履修上の注意及び予習・復習

授業で取り扱う研究論文課題について、丁寧に調べ、自らの意見をしっかりとまとめることができるよう予習、復習すること。欧米の文献を使用するので、英語力も身につけることを求める。

評価方法

授業時の積極的参加度、課題への取組および試験によって評価する。

テキスト

WHO、The World Bank “Tracking Universal Health Coverage”（2015）を使用するので、各自ダウンロードして持参すること。

授業概要

本講義では、世界的な競争の中で海外企業との競争激化に直面している日本産業・企業の今後の発展課題を、自動車、電機などに代表される量産領域の機械産業と、それらのものづくりを機械設備面で支えている工作機械、半導体製造装置などの非量産領域の生産機械産業の実態分析を通じて講義する。特に、日本産業を構成する大企業、中小企業の生産・取引構造の変化が及ぼす影響を、国内外を含めた地域的視点に基づき講義する。

授業計画

第1回	講義内容についてのガイダンス
第2回	日本産業と地域企業(1)
第3回	日本産業と地域企業(2)
第4回	日本産業と地域企業(3)
第5回	日本産業と地域企業(4)
第6回	地域企業と中小企業(1)
第7回	地域企業と中小企業(2)
第8回	地域企業と中小企業(3)
第9回	地域企業と中小企業(4)
第10回	地域企業と海外展開(1)
第11回	地域企業と海外展開(2)
第12回	地域企業と海外展開(3)
第13回	地域企業と海外展開(4)
第14回	地域企業の発展課題(1)
第15回	地域企業の発展課題(2)

到達目標

世界的な競争に直面している日本産業と地域企業の発展課題を理解することを目標とする。また、それぞれの研究テーマと本講義での理論との相互関係についても理解できることを目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

単に講義で学ぶという姿勢に終わることなく、自らの研究課題を踏まえ、積極的に議論することを求める。また、取り上げる参考文献等を単に読むだけでなく、それに対しての意見を持ち議論できるように準備することを求める。

評価方法

テーマに関する報告、議論に基づき判断する。

テキスト

必要に応じて、テーマに即した資料を配布する。

参考文献：加藤秀雄『外需時代の日本産業と中小企業』新評論、2015年

授業概要

日本企業は消費の低迷とグローバル化(新興国の発展)などにより、業績の不振が続いている。日本企業がこのような低迷から抜け出し国際競争力を取り戻すためには、市場のニーズを明確に把握し、将来性のあるセグメントを明確にして選択と集中を推進することである。本講義では的確な選択と集中のために必要な、将来の技術トレンドの把握、消費者の欲求の把握などが、日本企業によってどのようにおこなうべきかを、代表的な複数の企業の事例を見つつ講義する。

授業計画

第1回	はじめに
第2回	選択と集中の学説研究(1)
第3回	選択と集中の学説研究(2)
第4回	選択と集中の学説研究(3)
第5回	日本企業の選択と集中(シャープ、パナソニック、ソニー等)(1)
第6回	日本企業の選択と集中(シャープ、パナソニック、ソニー等)(2)
第7回	日本企業の選択と集中(シャープ、パナソニック、ソニー等)(3)
第8回	日本企業の選択と集中(シャープ、パナソニック、ソニー等)(4)
第9回	米国企業の選択と集中(IBM、GE等)(1)
第10回	米国企業の選択と集中(IBM、GE等)(2)
第11回	データマイニングを利用した選択と集中(1)
第12回	データマイニングを利用した選択と集中(2)
第13回	データマイニングを利用した選択と集中(3)
第14回	データマイニングを利用した選択と集中(4)
第15回	まとめ
第16回	定期試験

到達目標

日本企業の現状と課題についての高度な実証分析手法の習得。
選択と集中の将来の方向性についての独創的分析能力の涵養。

履修上の注意及び予習・復習

関連する学術文献を理解し、現在進んでいる日本企業の技術経営の動きについて日々フォローする努力が必要である。

評価方法

基本的に学期末テストによって評価するが、部分的に出席も考慮する。

テキスト

授業中適宜指示する。

授業概要

本講義は、修士課程の比較経営史特論における講義内容に関する理解を前提として、次の二点についてやや高度な内容を扱う。①シュンペーターの企業者論を中心とする経営史研究の方法論上の諸問題、②株式会社制度の発展過程に関する日米の比較分析

歴史分析の枠を超えて、近年の企業統治をめぐる諸問題等に関して分析を試みる場合にも有効な視点を提供することを目標として講義する。なお、上記の②にための教材として、以下の文献を活用する。John Micklethwait & Adrian Wooldrige, *The Company, A Short History of a Revolutionary Idea* (The Modern Library 2003) 邦訳『株式会社』(ランダムハウス講談社、2006年)

授業計画

第1回	オリエンテーション：講義プランの説明	
第2回	経営史研究の方法論：1 シュンペーターの企業者論	
第3回	経営史研究の方法論：2 チャンドラー・モデルの検討	
第4回	経営史研究の方法論：3 ガーシェンクロンモデルと後発効果仮説	
第5回	株式会社制度の発展過程：1 テキスト序章～第3章	
第6回	株式会社制度の発展過程：2 テキスト第4章～第5章	
第7回	アメリカにおける大企業形成と株式会社制度：1 特許主義の時代	テキスト第4章
第8回	アメリカにおける大企業形成と株式会社制度：2 鉄道の役割	テキスト第4章
第9回	アメリカにおける大企業形成と株式会社制度：3 製造業の場合	テキスト第4章
第10回	アメリカにおける大企業形成と株式会社制度：4 経営者資本主義	テキスト第6章
第11回	日本における大企業形成と株式会社制度：1 渋沢栄一の合本主義	テキスト第5章
第12回	日本における大企業形成と株式会社制度：2 財閥の所有と経営	テキスト第5章
第13回	日本における大企業形成と株式会社制度：3 戦前と戦後の比較	テキスト第5章
第14回	日本における大企業形成と株式会社制度：4 戦後日本の経営者	テキスト第6章
第15回	株式会社制度の日米比較分析と自由討論	
第16回	定期試験	

到達目標

- ① 株式会社の経営の多様なあり方について認識を深めること
- ② 論文内容の読解力とプレゼンテーション能力の向上

履修上の注意及び予習・復習

- ① クラスでの議論に積極的に参加できるように、予習としてテキストを熟読すること
- ② 復習のために講義内容をノートにまとめること

評価方法

- ① 授業における報告の内容・討論への参加状況などの総合評価
- ② 課題として課す予定のテキストを対象とした書評のレベル

テキスト

John Micklethwait & Adrian Wooldrige, *The Company, A Short History of a Revolutionary Idea* (The Modern Library 2003) 邦訳『株式会社』(ランダムハウス講談社、2006年)

授業概要

本講義では、いわゆる「日本的経営」の形成、変遷の過程を丹念に考察し、「日本的経営」の特質を考究する。戦後の日本企業は当時のアメリカ経営の姿を「普遍的で一般にあるべき姿」として捉え、経営者の多くはアメリカの経営から貪欲に学び、その経営モデルに接近しようとした。しかし、興味深いことに、その過程に日本で出来上がった経営方式はアメリカのコピーではなく、また他国とも異なった極めて「日本的」な特徴をそなえたものであった。本講義では「日本的経営」のこれまでの研究を概観したうえで、戦後日本企業における「集団主義」、「集団的行動」をメインテーマとして取り上げる。また「日本的経営」との関連で、アジア、特に中国の企業経営史の特徴と問題点について、「日本的経営」との比較を念頭に併せて講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス（授業方法、授業計画、到達目標、基本文献の紹介など）
第2回	「日本的経営」とは何か（1）日本的経営の源流（江戸時代の企業経営と「経営家族主義」）
第3回	「日本的経営」とは何か（2）ジェームズ・アベグレン『日本の経営』における論点——「三種の神器」の影響と限界
第4回	「日本的経営」とは何か（3）研究の系譜と論点の整理
第5回	日本的経営と伊丹敬之の「人本主義」
第6回	日本的経営と加護野忠男の「愚直の経営」
第7回	日本企業のアメリカ経営モデルへの接近と揚棄（1）——アメリカ経営方式の導入過程
第8回	日本企業のアメリカ経営モデルへの接近と揚棄（2）——アメリカ経営方式の吸収と改良
第9回	日本の経営組織と日本的集団行動の特質（1）
第10回	日本の経営組織と日本的集団行動の特質（2）
第11回	JITと集団主義的経営——価値の共有とモチベーション
第12回	中国国有企業の組織と個人の関係（1）——改革開放前後の変化
第13回	中国国有企業の組織と個人の関係（2）——日・米との比較を兼ねて
第14回	日本的経営の海外移転
第15回	「日本的経営」と企業経営のグローバル化
第16回	定期試験

到達目標

本講義を通じて、修士課程で習得した知識をもとに、戦後復興期から高度成長期までの日本の経済・経営発展の全般をより広く深く理解し、独創性豊かな自立した研究者の養成を目指す。

履修上の注意及び予習・復習

与えられた課題を必ず完成すること、講義内容の議論に積極的に参加すること。指定参考書を必ず通読すること。

評価方法

授業および課題への取り組みと定期試験によって評価する。

テキスト

授業中に適宜指示する。

授業概要

修士課程の講義を発展・深化した株式会社財務論の諸問題を、理論・制度・政策から時代的意義を踏まえ講義する。具体的には、株式会社の経済的機能を金融論学説、経営学説からその論理体系上の視点から講義する。株式会社の経済的特徴は、自らの資本を株式証券化（資本の商品化）することにより社会的な資本を集中するところにある。株式会社の資本金は、株主有限責任社員の結合として成立する。今般の会社法は、株式会社の資本金・資本準備金を取崩して、配当分配、自己株式取得の財源とする改正を行った。株式会社の資本理念を揺るがす大改正がなされたことに関して、理論、制度、金融市場の時代的背景の視点から講義する。株式会社と証券市場の関係、株価形成、資本金制度、準備金制度、剰余金制度、剰余金の分配制度、自己株式制度と証券市場の変質、種類株式制度、新株予約権制度、IFRS への会計基準の調和化による会社財務への影響をも講義する。

授業計画

第 1 回	株式会社財務論の方法論
第 2 回	株式会社論の金融学説の問題
第 3 回	株式会社論の経営学説の問題と株式会社方法論の展開
第 4 回	株式会社法の資本制度の戦前・戦後の変遷と新会社法での時代的なその制度改正の意味
第 5 回	会社法にける資本金制度と今日的な大規模会社の資本政策—資本金の取崩し緩和改正の意味
第 6 回	会社資本コスト問題、株主価値最大化についてのその資本政策の時代的意味
第 7 回	資本準備金制度、利益準備金制度とその制度変遷の時代的意味—会社法の準備金制度の緩和改正の意味—
第 8 回	剰余金制度と剰余金の分配制度と包括利益開示（IFRS への調和化）の時代的意味
第 9 回	自己株式制度と平成 13 年のその緩和改正に至るまでの歴史的意味と問題点
第 10 回	自己株式の取得の拡大と証券市場の変質問題
第 11 回	剰余金の分配制度、処分可能額の算定制度と分配政策としてのパイアウトの変化の意味
第 12 回	分配政策：利益配当から剰余金の分配への変化の時代的な意味
第 13 回	全面無額面株式化、種類株式制度とその財務政策：会社再生と DES の優先株式の利用、M&A と黄金株式等導入の時代的意味
第 14 回	戦後の高経済成長下の自己資本比率低位性と低経済成長期時代の自己金融化、バブル経済壊後の無謝金経営化とグローバルな金融不安に備えた財務体質、株価政策
第 15 回	株式所有の法人化：外人持株増加と株式持合の減少変化の時代的な会社経営支配の支配構造の変質と金融商品会計基準の導入、ガバナンスの透明性開示制度導入の財務的な意味・影響
第 16 回	期末試験

到達目標

- ① 会博士論文の作成のための高度な株式会社財務理論・制度と技法の習得。
- ② 株式会社財務の諸問題の題把能力の育成と分析能力の育成。

履修上の注意及び予習・復習

- ① 参考文献等の課題について正確な理解と批判力を持つこと。
- ② 研究方法等について自己の論文の作成に活かすよう心がけること。
- ③ 90 分の講義に対して最低 3 時間程度の予習・復習に努めること

評価方法

授業での平常評価と課題提出物の総合評価。

テキスト

授業で適宜提示する。

参考文献：箕輪徳二著『戦後日本の株式会社財務論』 泉文堂

同編著『株式会社の財務・会計制度の新動向』 泉文堂他

授業概要

今日、企業経営は従来の規制上の情報開示にとどまらず、株主・投資家など市場に向けた任意の情報発信（IR）に対する取り組みによって大きく左右される時代です。本講では、米国や欧州における IR 活動の歴史的な展開を具体的に追って、英米の規制動向、機関投資家の変貌、政府系ファンド（SWF）の動向、証券アナリストや議決権行使助言業者の展開と現状など、証券市場の参加者が果たしてきた役割を明らかにし、リーマンショック後の金融危機で問われた短期主義の証券投資を問い、今日の企業情報が直面する課題を考察する。

授業計画

第 1 回	投資家向け広報（IR）活動の始まりと展開（1）全米 IR 協会（NIRI）の 50 年
第 2 回	（2）英国 IR 協会（IRS）の IR ベストプラクティス
第 3 回	証券規制の展開（1）公平開示規則と Plain English 規則
第 4 回	（2）エンロン事件と企業改革法（SOX）
第 5 回	（3）企業ウェブサイト・ガイダンス
第 6 回	証券アナリスト（1）その役割と歴史
第 7 回	（2）コンセンサスとアナリスト評価
第 8 回	グローバル投資家（1）DR（預託証券）市場の進展
第 9 回	（2）株主 ID（実質株主）と投資家ターゲティング
第 10 回	（3）モノ言う株主、SRI 投資家
第 11 回	議決案助言業者（1）エイボン・レター、ISS の始まりと進展
第 12 回	（2）議決権案件の動向と課題
第 13 回	投資の短期主義（1）リーマンショックと空売り規制
第 14 回	（2）ケイ・レビューとコーポレートガバナンス・コード
第 15 回	日本の IR 活動：課題と展望
第 16 回	期末試験

到達目標

博士論文の作成に必要な基本的な先行文献の理解

履修上の注意及び予習・復習

指示された課題について論点報告を行う。

証券市場における企業情報に関連するテーマを博士論文とするのか、自らの博士論文に対する別のテーマ

で授業で臨むのかを自覚したうえで受講すること。

評価方法

講義での質問応答、提出された課題の報告状況で判断する

テキスト

講義中に適宜、指示する。

参考文献として、米山徹幸『21 世紀の企業情報開示 ～欧米市場における IR 活動の展開と課題～』（社会評論社）

授業概要

今日の経済社会では、マーケティング活動が個々の組織にとって重要な役割を果たしているだけでなく、消費生活や社会全体にも大きな影響力を有しているとの認識のもと、本講義は、修士課程の講義を発展させ、企業の内部と社会（市場）の両面からマーケティング論を論ずる。マイクロマーケティング（マーケティングを行なう側からの戦略的視点）の枠にとどまらず、マクロマーケティング（マーケティングと社会との相互関係性の視点）の課題を主として講義する。特に企業のマーケティング活動に欠かせないものづくり（製品戦略）におけるイノベーションや、イノベーションの担い手となるアントレプレナーについて、マーケティングとの関係性についても取り上げることとし、論理的視点だけでなく企業や活動組織の事例を論理的、学術的視点から講義を行う。

授業計画

第1回	授業ガイダンス（授業の進め方、マーケティング研究の対象と本質についての説明）
第2回	ノンプロフィット・マーケティング
第3回	マーケティング拡張論争の検討
第4回	非営利組織のマーケティングの展開（事例研究：学校法人、医療法人、公共事業等）
第5回	エコロジカル・マーケティング（環境マーケティング）の特質
第6回	環境問題概論
第7回	ソーシャル・マーケティングとエコロジカル・マーケティングの関係性
第8回	持続可能社会に向けた企業の取り組みの現状と検討
第9回	マーケティングとイノベーション
第10回	イノベーション概論
第11回	産業界におけるイノベーション（事例研究：自動車産業、住宅業界）
第12回	顧客価値と価値創造
第13回	消費社会と消費者行動概論
第14回	情報化とマーケティング
第15回	ブランド・マーケティング
第16回	定期試験

※講義の進行は、受講生の理解の度合いや討論の進行などによって適宜変更する。

到達目標

- ①博士論文作成に資する高度な課題把握、分析能力の習得
- ②マーケティングにおける社会との関係性における課題把握能力、分析能力の育成。

履修上の注意及び予習・復習

- ①課題や指定文献に対し正確な理解と自らの見解を持つこと。
- ②研究方法等について自己の論文作成に活かすよう努めること。
- ③講義に対して必要十分な予習・復習に努めること

評価方法

講義への出席（講義回数数の2/3以上の出席）、討論への参加（課題や指定文献を事前に講読・検討し、講義において自らの見解を説得的に提示する）、定期試験（課題提出物）から総合的に評価する。

テキスト

授業で適宜提示する。

参考文献：白鳥和彦著『環境企業家と環境経営の新展開』税務経理協会、2009年

授業概要

今日、企業の競争優位の源泉として、物的資源、金銭的資源、情報資源といったさまざまな経営資源の中で人的資源（Human Resource）、すなわち従業員の資質が注目されている。労務管理とは、そうした企業におけるヒトを対象にした管理活動のことであり、今日的には人的資源管理とも称される。本講義では、労務管理の経営上の意義とともに、とくに日本企業の労務管理に目を向け、従業員の調達・育成・活用・評価・処遇といった労務管理の基幹的な活動の実際を中心に講義・説明していく。

授業計画

第1回	授業計画の説明
第2回	現代の労働と労務管理
第3回	労務管理の基礎理論
第4回	労務管理とは何か（労務管理の技術構造）
第5回	日本型労務管理の特徴とその変化
第6回	今日の企業の雇用政策
第7回	従業員の調達（新卒採用と雇用のミスマッチ）
第8回	従業員の配置と異動（人と職務の最適適合の追求）
第9回	従業員の雇用調整（雇用継続と雇用流動化の要請）
第10回	従業員の育成
第11回	従業員の勤務形態と労働時間の管理
第12回	従業員の評価（人事制度と人事評価）
第13回	従業員の処遇（成果主義賃金化）
第14回	職場管理者の労務管理責任（主としてリーダーシップ行動）
第15回	まとめとレポート提出
第16回	レポート評価

到達目標

労務管理の理論的知識をベースにし、とくに日本企業における労務管理の実践的な課題を明確に説明できること。

履修上の注意及び予習・復習

本講義では、テキストの熟読を基本とする。各回テーマに対応するテキストの該当ページを要約したレジュメを作成・説明するとともに、議論点を提案してもらおう。一方的な講義形式は避け、いわゆるディスカッション方式を採用する。また私の方から適切な映像資料を提供し、教育効果の向上に努めていく。

いちおうの講義計画を示しているが、学位論文の作成に従事する後期課程ゆえに、学生の学習ニーズに応じ、相談の上で講義テーマを修正していく場合もある。

評価方法

課題レポート（50%）と平常点（50%）で評価する。平常点は、レジュメの適切度や発表態度、議論の盛り上げを中心に見ていく。

テキスト

岩出 博著『LECTURE 人事労務管理（増補改訂版）』泉文堂、2016年。

授業概要

金融のイノベーションと資本市場のグローバル化が、世界の財務会計制度を急速に変えつつある。国際財務報告基準（IFRS）に象徴されるように、グローバル化時代の会計基準は、収益費用アプローチから資産負債アプローチへの会計観の転回として特徴づけられる。本講義では、修士課程で講義した資産負債アプローチに基づく会計諸基準の知識を踏まえて、博士論文の作成に必要な水準に理論を深化させるとともに、現実問題の実証分析に必要な技法を習得させることを目標とする。具体的には、「金融商品」、「公正価値測定」、「収益認識」など、資産負債アプローチに基づく先端的な会計基準の計算構造とその基礎をなす概念フレームワークを体系的に講義する。その上で、ディスクロージャー制度で開示される会計情報を実証的に分析するための技法について講義する。

授業計画

第1回	ガイダンス—受講生の問題関心の確認、テキストの紹介ほか
第2回	グローバル化の中での会計研究の方向性
第3回	財務会計における「理論と実証分析」の概要
第4回	経済社会のインフラとしての財務会計制度
第5回	財務会計の法的規制と会計基準の体系
第6回	会計基準の基礎をなす概念フレームワーク
第7回	損益認識と資産・負債評価の関連性（アーティキュレーション）
第8回	収益費用アプローチと資産負債アプローチ
第9回	純利益と包括利益—理論分析と実証成果
第10回	負債と資本の概念的分析
第11回	条件付持分請求権の会計
第12回	財務諸表の表示—営業・投資・財務の活動別表示
第13回	収益認識—実現稼得モデルと顧客契約モデル
第14回	金融商品会計と公正価値測定
第15回	会計情報の実証的分析
第16回	定期試験

到達目標

- ① 博士論文の作成に必要なレベルの会計理論と実証分析に関する知識および技法を習得する。
- ② グローバル化の中での先端的な会計問題（金融商品や収益認識）について分析力を深める。
- ③ 会計情報と金融・資本市場との関係について実証的に分析する仕方を身につける。

履修上の注意及び予習・復習

- ① テキストに基づきながら、必要に応じて有価証券報告書や新聞記事等の補助教材（プリント）を配布して講義・ディスカッションを行う。
- ② 講義形式を基本とするが、受講生に課題を与えて発表してもらうことがある。
- ③ 授業 90 分に対して最低でも 3 時間程度の予習・復習に努めること。

評価方法

- ① 受講状態（質疑応答など授業への参加姿勢が積極的かどうか） 40%
- ② 期末試験またはレポート報告（テキストの分担報告や財務データによる実証分析の優劣） 60%

テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業中に適宜指示する。

〈参考文献〉

大日方 隆『アドバンスト財務会計』中央経済社

Scott, W.R., *Financial Accounting Theory*, Pearson

授業概要

管理会計は、経営管理に有用な会計情報を提供することを目的とする。しかしそれは特定の計算制度や計算技法を意味するものではない。それは経営管理に役立つ様々な会計技法や概念を包摂したその総体を意味するものである。本講座では、これまで管理会計分野で開発されたきた会計技法について取り上げるとともに、現在の経営環境において重要とされている経営戦略とのかかわりのなかで管理会計技法をどのように役立たせることができるかを講義する。たとえば、活動基準原価計算、品質原価計算、スループット会計、原価企画、マテリアルフローコスト会計などを取り上げながら、当該企業にとって適切な管理会計システムとは何かを講義する。

授業計画

第1回	ガイダンスー管理会計で何ができるか
第2回	現代の経営環境の変化と新しいコストマネジメント概念の利用
第3回	利益計画について
第4回	予算について
第5回	予算について
第6回	予算について
第7回	コストマネジメントシステム
第8回	コストマネジメントシステム
第9回	コストマネジメントシステム
第10回	標準原価計算：直接材料費と直接労務費
第11回	標準原価計算：製造間接費
第12回	生産性の管理とマーケティング効果の管理
第13回	マネジメントコントロールと戦略的業績尺度
第14回	戦略的投資単位と振替価格
第15回	管理者の報酬と企業評価
第16回	定期試験

到達目標

- ・博士論文作成のために必要な基本的な理論と技法の修得
- ・現代の企業が抱えている様々な問題を管理会計の視点からアプローチできる

履修上の注意及び予習・復習

とくに管理会計の知識はなくともよいが、企業の経営管理について深く考えておいて欲しい。また、授業で指定した文献以外にも関連する多くの事例・文献がありますので、積極的に調査・研究をすることを求める。

評価方法

授業における参加態度と課題提出物、および期末試験の総合評価

テキスト

レジュメあるいは関連する論文コピーを配布する
 (参考文献)
 受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

本講義の目的は修士課程での国際会計特論の講義の水準を発展・進化させることを踏まえて、論文作成に必要な国際会計論の理論を学ぶことである。IFRS 適用には資産と負債における公正価値の評価範囲の拡大と包括利益の表示による利益概念の変化に対処することが要求される。この講義では、こうした問題意識を持って、IFRS 適用企業を中心に財務諸表の事例分析を通して、IFRS と日本基準との理論的関連性を分析するとともに、IFRS 適用のあり方や日本の企業会計の国際的に対応するための手法を講義する。

授業計画

履修者の学習進度との兼ね合いで、以下の予定(・内容)を一部修正することがある。

第1回	国際会計基準(IFRS)の意義とその特徴
第2回	会計国際化の変遷とIFRS適用の状況
第3回	日本基準の固有性とIFRSとの関連性分析(1)
第4回	日本基準の固有性とIFRSとの関連性分析(2)
第5回	公正価値会計の特徴と論点整理
第6回	公正価値会計の適用上の個別論点
第7回	公正価値評価とその影響分析の争点
第8回	会計観の相違と利益概念の変化との関連性
第9回	包括利益の概念と論点整理
第10回	包括利益の導入と業績報告
第11回	IFRS適用企業の実態分析とその検討(1)
第12回	IFRS適用企業の実態分析とその検討(2)
第13回	IFRS適用企業の実態分析とその検討(3)
第14回	IFRS適用企業の実態分析とその検討(4)
第15回	日本におけるIFRS適用の課題とその可能性の検討

到達目標

国際会計の諸問題の分析力を高めること、専門的表現能力を確立する

履修上の注意及び予習・復習

大学院の授業という性格上、一方的な講義というよりも、インタラクティブな授業を前提とした進め方で、国際会計について学ぶ。ある程度基本的な会計の知識があるほうが便宜であるが、事前に授業の都度、基礎的な参考書等で補う形で参加することも可能である。仔細については、履修者との個別の相談により進行していく予定である。

評価方法

授業に対する参加度、課題の提出などにもとづき総合的に評価を行う。

テキスト

履修メンバーや会計に対する習熟度などを勘案し、履修者と相談の上、初回授業時に指示する。

講義概要

財務会計における近時の動向は、投資家の意思決定に有用な会計情報の提供に関して、投資環境のグローバル化を背景として、ドメスティックな制度をもとにしたものではなく、国際的に共通したルールにもとづく、インターナショナルな比較可能性、同一の尺度性を有する情報提供へと移行しつつある。そのような国際環境にもとづく会計基準である IFRS について講義する。

講義計画

履修者の学習進度との兼ね合いで、以下の予定(・内容)を一部修正することがあります。

第 1 回	授業内容の概要(シラバス)、評価の方法に対する説明など
第 2 回	財務会計の基礎
第 3 回	IFRS(国際財務報告基準)の基礎
第 4 回	IAS 第 2 号—Inventories・棚卸資産
第 5 回	IAS 第 16 号—Property, Plant and Equipment・有形固定資産
第 6 回	IAS 第 17 号—Leases・リース
第 7 回	IAS 第 38 号—Intangible Assets・無形資産
第 8 回	IAS 第 40 号—Investment Property・投資不動産
第 9 回	中間総まとめ講義
第 10 回	IAS 第 31 号—Interests in Joint Ventures・ジョイント・ベンチャーに対する持分
第 11 回	IAS 第 21 号—The Effects of Changes in Foreign Exchange Rates・外国為替レート変動の影響
第 12 回	IAS 第 18 号—Revenue・収益(改訂)
第 13 回	IAS 第 23 号—Borrowing Costs・借入費用
第 14 回	IFRS 第 9 号—Financial Instruments・金融商品
第 15 回	最終総まとめ講義

到達目標

インタラクティブな授業を前提とした進め方で、国際会計である IFRS について理解する。

履修上の注意及び予習・復習

大学院の授業という性格上、一方的な講義というよりも、ある程度基本的な会計の知識があるほうが便宜であるが、事前に授業の都度、基礎的な参考書等で補う形で参加することも可能である。仔細については、履修者と個別に相談しながら習熟度や関心に沿って進行していく予定である。

評価方法

授業に対する参加度、研究報告・課題の提出などにもとづき総合的に評価を行う。

テキスト

IFRS 基準書を使用するほか、参考/研究書としては、履修メンバーや会計に対する習熟度などを勘案し、履修者と相談の上、初回授業時に指示する。

授業概要

租税法に関する知識の確認を行うとともに、他の法律（憲法・行政法・民法など）および隣接科学（経済学・経営学など）の基本を理解することを目標とする。また、わが国租税法の歴史的経緯・制度の概要だけでなく、欧米の租税法についてもその基本を理解することとする。そして、今日の世界の中で租税の果たす役割を確認する。その上で、自己の博士論文テーマに関する事項については、特に深い知識を修得することを目標とする。

授業計画

第1回	講義についてのガイダンスと打ち合わせ
第2回	租税法律主義と租税公平主義
第3回	わが国租税法の歴史（戦後を中心に）
第4回	シャープ勧告の意義
第5回	租税法と信義誠実の原則
第6回	租税回避の意義
第7回	租税回避における法解釈（限定解釈を中心に）
第8回	租税法における紛争解決（審査請求・裁判・仲裁）
第9回	申告納税制度と源泉徴収制度
第10回	所得税の理論的根拠
第11回	法人税の課税ベース
第12回	法人税における時価主義
第13回	国際課税の基本的仕組み（欧米諸国との制度比較）
第14回	租税条約の意義
第15回	国際的租税回避
第16回	定期試験

到達目標

- ①博士論文の作成に必要な基本的な制度趣旨・意義の修得。
- ②租税法と現代社会との関係について理解を深める。
- ③法解釈の基本を身につける。

履修上の注意及び予習・復習

- ①自己の論文のテーマに関する分野については、予習が必要であり、授業での積極的な貢献が求められる。
- ②それ以外の分野についても、十分な復習が必要である。
- ③研究の幅を広げるために受講する場合、租税法と隣接する学問分野との関係に留意すべきである。

評価方法

- ・平常点50%、課題レポート50%。

テキスト

- ・開講時に指示する他、適宜関係資料を配付する。

授業概要

本講義では、修士課程での講義を深化・発展させ、博士論文の水準に必要な高度な知識の習得を目指す。近年繰り返し起っている通貨危機の対応策として、先行する諸理論の有効性と問題点を講義する。貨幣に関する諸理論については、貨幣システムが多様化していることを踏まえて、本質論・機能論・貨幣数量説を中心に講義する。現実の通貨危機の課題、特にアジア通貨危機とリーマン・ショック後のドル体制の不安定化の問題を踏まえて、基軸通貨のあり方と通貨量の管理の問題を講義する。さらに通貨危機の対応策としてのアジア統一通貨の可能性と国際通貨制度改革の方向性を講義する。なお、授業中、受講学生の研究テーマに対応した研究論文について適宜取り上げ講義する。

授業計画

第1回	講義に関するガイダンス
第2回	貨幣本質論と信用貨幣の発展
第3回	貨幣の機能と進化
第4回	貨幣数量説の有効性と課題
第5回	貨幣量管理の諸問題
第6回	中央銀行券と政府紙幣の差異に関して
第7回	国際基軸通貨とシニョレッジの問題
第8回	ドル基軸通貨論の限界と方向性
第9回	変動相場制の意義と問題点
第10回	地域統一通貨論—最適通貨圏論の意義と限界
第11回	地域単一通貨ユーロの形成と問題
第12回	アジア通貨危機—変動相場制と固定相場制の併存
第13回	アジア統一通貨の意義と方向性
第14回	金本位制復活論の意義と限界
第15回	国際決済通貨としてのSDR・バンコールの可能性
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、とりわけ通貨問題の重要性が増している状況に鑑み、貨幣論に関して、修士課程における研究を深化・発展させ、博士論文の作成に必要な高度な理論と分析力を習得し、独創性のある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

授業中に取り扱う研究論文と原典について十分な予習と行うこと。また、本講義を併せて、金融論特講、国際金融論特講を受講することが望ましい。授業中、受講生の研究状況に応じて課題を指定するので積極的に取り組むこと。

評価方法

授業および課題への取り組みと定期試験によって評価する。

テキスト

授業中に適宜関連文献を紹介する。

授業概要

博士前期課程での学習を踏まえて、本講義では金融システムの構造と動態に関する知識を、特に中央銀行の金融政策に力点を置いて深化させる。金融政策の方式と効果については、標準的なマクロ経済理論と中央銀行の実務者のアプローチにはかなりの乖離がある。この乖離について、実務と理論を総合する見地に立って、理論と実証の両面から、また具体的には日本とアメリカ合衆国の金融政策を比較しつつ考察する。最終目標は21世紀の金融政策を構想することにある。

授業計画

第1回	講義の構成と概要
第2回	金融レジームと資本蓄積レジーム—概論
第3回	中央銀行の金融政策（1）理論
第4回	中央銀行の金融政策（2）実際
第5回	中央銀行の金融政策（3）批判的統合
第6回	日本銀行の金融政策—復興期
第7回	日本銀行の金融政策—高度成長期
第8回	日本銀行の金融政策—安定成長への移行期
第9回	日本銀行の金融政策—バブルとその崩壊期
第10回	日本銀行の金融政策—デフレ下の混迷期
第11回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—1970年代まで
第12回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—ボルカー時代
第13回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—グリーンスパン時代
第14回	アメリカ連邦準備制度の金融政策—バーナンキ時代から現在まで
第15回	21世紀の金融政策
第16回	定期試験

到達目標

本講義では資本蓄積レジームにおける金融レジームの動態について、中央銀行の金融政策に力点を置いて考察する。金融政策の理論と実際の乖離に注目し、通説に批判的にアプローチして、博士論文作成に欠かせないオリジナルな分析能力と構想力を育成する。

履修上の注意及び予習・復習

必要な文献を予め指定するので必ず予習して出席し、積極的に問題を提起し議論すること。

評価方法

授業への取り組みと数回のレポート、および定期試験を総合して判定する。

テキスト

英語論文を含む関連文献を講義の進行に合わせて、適宜指定する。2だけ挙げておけば、次の通りである。

Eckhard Hein and Engerbert Stockhammer eds., *A Modern Guide to Keynesian Economics and Economic Policies*, Northampton, MA: Edward Elgar.

Marc Lavoie, *Post-Keynesian Economics: New Foundations*, Northampton, MA: Edward Elgar.

授業概要

本講義では、国際金融の理論、歴史、制度に関して、博士論文作成に必要な高度な学術研究能力の習得を目標とする。現在の長期化する世界金融危機の分析と解決案の提示を中心的な問題関心として、グローバル化する国際金融市場における資金移動その偏在によるバブルの発生・崩壊の関係、ユーロの成立と欧州債務危機の分析、ポリティカル・エコノミーの観点からの日米欧で展開されている「世界通貨戦争」の実態分析・課題とその方向性を講義する。なお、講義中に受講院生の研究テーマに対応した学術研究について取り上げて講義する。

授業計画

第1回	講義のガイダンス
第2回	国際金融市場の制度と理論（1）－国際支払い決済
第3回	国際金融市場の制度と理論（2）－国際収支と資金のインバランス問題
第4回	国際金融市場の制度と理論（3）－外国為替変動と資本移動問題
第5回	国際金融市場の制度と理論（4）－国際通貨、ドル基軸通貨の揺らぎ
第6回	国際金融市場の制度と理論（5）－国際金融市場の安定化策
第7回	ブレトンウッズ体制の歴史的意義と限界
第8回	アメリカの金融市場の変容と不動産バブル
第9回	サブプライムローン債権の証券化の失敗と世界的金融市場の危機
第10回	アジアにおけるアメリカ・ドルのドルの役割－アジア通貨危機とチェンマイ合意
第11回	ヨーロッパの財政金融統合の進展とその課題
第12回	ユーロの導入の歴史的課題と動揺
第13回	ヨーロッパの住宅・国債バブルがもたらしたユーロ圏の金融危機
第14回	ヨーロッパの債務危機の対応策－金融監査と財政の統合問題
第15回	「世界通貨戦争」と国際金融市場の行方
第16回	定期試験

到達目標

修士課程における研究で習得した知識を深化・発展させ、博士論文の作成に必要な水準の理論の習得と独創性のある問題解決能力の育成を目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

授業中に取り扱う研究論文と原典について十分な予習と行うこと。また、本講義を併せて、金融論特講、貨幣論特講を受講することが望ましい。授業中、受講生の研究状況に応じて課題を指定するので積極的に取り組むこと。

評価方法

講義及び課題への取り組みによって評価する。

テキスト

講義中に適宜関連文献などを紹介する。

授業概要

本講義では、修士課程における研究を深化・発展させ、国際金融論に関する高度な学術研究能力の習得を目標とし、博士論文作成に必要な水準の理論・歴史及び制度を講義する。1980年代のアメリカの商業銀行・S&Lの不良債権問題の実態を分析し、不良債権処理と国際金融危機との関係、具体的には中南米の累積債務問題とアメリカ共和党政権の対応とその成果を講義する。この分析を踏まえ、サブプライム危機による不良債権問題とリーマン・ショックによる国際金融危機の深化とその対策を講義する。なお、講義中、学受講生の研究課題に即して適宜必要な学術論文を取り上げる。

授業計画

第1回	ガイダンス
第2回	国際通貨・金融に関する理論（1）—国際通貨論と基軸通貨体制の揺らぎ
第3回	国際通貨・金融に関する理論（2）—為替理論、国際収支理論
第4回	変容する国際金融—ドル危機とブレトンウッズ体制の崩壊の教訓
第5回	国際金融市場の変容—為替相場とグローバル・インバランス
第6回	世界金融危機の契機となった不良債権問題
第7回	国際金融危機の原点としての1980年代の中南米債務問題
第8回	中南米累積債務問題と債権の証券化—プレディプランの有効性の検討
第9回	グローバル・インバランスとサブプライムローンの証券化の破綻問題
第10回	アメリカの資産の証券化の失敗と金融規制—ドット・フランク法の成立
第11回	金融市場の不安定化の常態化問題
第12回	欧州の国債危機と金融危機
第13回	欧州の金融機関の不安定化問題とバーゼル合意
第14回	世界的金融危機と各国の金融規制
第15回	金融グローバル化の問題点と金融市場の不確実性への対策
第16回	定期試験

到達目標

本講義では、修士課程における研究を深化・発展させ、国際金融市場が抱える今日的課題に鑑み、博士論文の作成に必要な国際金融に関する高度な理論と分析力を習得し、独創性のある視点から問題を解決する能力を育成することを目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

授業中に取り扱う研究論文と原典について十分な予習と行うこと。また、本講義を併せて、金融論特講、貨幣論特講を受講することが望ましい。授業中、受講生の研究状況に応じて課題を指定するので積極的に取り組むこと。

評価方法

- ①授業中の発言内容など平常点
- ②課題に対するレポートの評価点

テキスト

授業中に指示する

参考文献：本澤実『国際金融システムの再構築』（御茶の水書房）

授業概要

本講では修士課程での知見を深化・発展させ、リスク管理の企業経営への適用について講義を行う。ここ数年で世界の様相は大きく変化し、日本企業が進出乃至は市場とする各国においても自然災害、テロ、金融市場の混乱等の様々な形態の危機が発生してる。こうしたリスクに適切に対応し企業活動を円滑に行うために必要な視点を提供し、影響を極小にするための方法を講義する。グローバルな企業経営において直面するビジネスリスク、市場リスク、信用リスクなどの多様なリスクに対応するための様々な視点を提供する。

授業計画

第1回	グローバル企業のリスク
第2回	現代のグローバルアジェンダ
第3回	グローバルリスク1
第4回	グローバルリスク2
第5回	グローバルリスク3
第6回	リスクの根幹はどこにあるか
第7回	グローバルリスクのまとめ
第8回	リスクの原因の解決1
第9回	リスクの原因の解決2
第10回	リスクの原因の解決3
第11回	様々な意見の紹介1
第12回	様々な意見の紹介2
第13回	国民国家とグローバル化
第14回	全体総括
第15回	学生プレゼンと論点整理

到達目標

修士課程でのリスク管理の講義での知識を基に、企業経営上のリスクに対する高い関心や感度を養成する。

履修上の注意及び予習・復習

修士課程でのリスクマネジメントの知識を基にし議論を進めることから、金融リスクの基本的知識は前提とする。

評価方法

講義での発言による講義編貢献度とレポート（A4 10枚以下）により評価。レポートは、仮設の適切性、議論の論理性、構成、結果の説得力の軸で評価する。

テキスト

授業中、適宜指示する。

授業概要

現代ファイナンス理論の基礎的思考法とその具体的分析手法を学ぶ。モダンポートフォリオ理論を基礎とする意思決定理論およびリスク管理論への応用、デリバティブ、債券を中心とする価格評価理論、信用リスクの評価理論を主とした講義を行う。受講者の研究テーマとの関連でトピクスやテーマの時間的ウエイトは調整する。

授業計画

第1回	取引市場の機能と構造、リスクの配分、合理的選択の理論
第2回	不確実性下の意思決定 リスクとリターン、MVアプローチ
第3回	機関投資家の投資行動とポートフォリオ管理、アセットアロケーション、ALM
第4回	リスク管理とその手法 基礎概念、ボラティリティと相関
第5回	VAR—指標、ヒストリカル法
第6回	VAR—モデル構築法
第7回	債券価格の決定と金利、金利の期間構造モデル
第8回	スワップの基礎、LIBO、イールドカーブ分析
第9回	金利デリバティブ—短期金利モデルとHJM モデル
第10回	社債価格と信用リスクと信用スプレッドの説明、
第11回	信用リスクモデル—KMVモデル—オプション理論的アプローチ
第12回	デフォルト確率の推定
第13回	デフォルト損失とデフォルト相関、信用格付け推移、
第14回	信用VAR
第15回	信用デリバティブ—CDS、CDOの評価
第16回	定期試験

到達目標

1. VARの概念、使用方法について習熟し、企業及びポートフォリオのリスク管理に活用できること。
2. 信用リスクの概念を理解しその測定と様々な手法をかつようできること。

履修上の注意及び予習・復習

毎回の宿題の発表、予習上の指定テキスト、論文を読んでまとめておくこと

評価方法

期末のレポート論文 60%、授業での発表および宿題の提出 40%

テキスト

バリュアットリスクのすべて：フィリップジョリオン、杉本正孝訳 シグマベスト
 クレジットリスクモデリング入門：クリスチャン・ブルーム他 森平総一郎監訳：シグマベスト
 ファイナンシャルエンジニアリング：ジョンハル 三菱証券商品開発部 訳 キンザイ

授業概要

サブプライムローン（2008年）、エンロン・ワールドコム（2001年）、アジア通貨危機（1997年）などで格付けの失敗が世界の経済を混乱させたがドクター・レベルの格付け研究者が少ないため賢明な解決策が提示されていないのが現状である。本授業は信用格付けについての研究者を育成することを目的とする。格付けの理論（格付けの役割・リスクとリターンの対応関係など）、格付けの歴史および制度（発祥地アメリカおよび世界への伝播・アメリカおよび日本並びにEUの格付け法体系など）、格付け情報の評価（情報の正確性の判定方法など）、格付けの手法（事業債・金融債・金融証券化商品・ソブリン・地方債などの格付け分析手法）などについて深く学び、信用格付けについての理論的・実務的体系を理解した上で、博士論文のテーマにすべき専門的分野をどのように探せばよいかを意図しながら授業を進める。

授業計画

第1回	講義についてのオリエンテーション
第2回	格付け概論（歴史的トピックスなどを例示して信用格付けについての理解を深める）
第3回	格付けの理論（1）金融・資本市場における格付けの役割
第4回	格付けの理論（2）信用リスクとリターンの関係（効率的資本市場における格付けのコンセプト）
第5回	格付けの歴史及び制度（1）アメリカにおける格付けの発祥と世界への伝播
第6回	格付けの歴史及び制度（2）サブプライム問題とアメリカ・日本・EUの格付け制度改革
第7回	格付け情報の評価：未来情報の評価の考え方・累積デフォルト率などによる格付け情報評価
第8回	格付けの分析手法（1）事業債・預金・保険・大学・医療機関などの格付け手法
第9回	格付けの分析手法（2）金融証券化商品・ソブリン国債・地方債の格付け手法
第10回	モデルによる模擬格付け手法：事業債格付けモデル・ソブリン国債格付けモデル
第11回	格付けの研究的問題点の発掘とその解決策（1）理論体系の問題点と解決策
第12回	格付けの研究的問題点の発掘とその解決策（2）制度的問題点と解決策
第13回	格付けの研究的問題点の発掘とその解決策（3）国際的問題点と解決策
第14回	質疑応答（1）先行研究に関連する質疑応答
第15回	質疑応答（2）今後解決すべき研究テーマに関連する質疑応答
第16回	定期試験

到達目標

- ① 格付けの理論・役割・実務等について深みのある理解を得る。
- ② 博士論文のテーマを決める上でのアプローチ方法を習得する。

履修上の注意及び予習・復習

- ① 企業の有価証券報告書などの業績報告書についての基礎的な知識が必要です。
- ② IMF・世界銀行などが公表するカントリー分析および統計について興味があること。
- ③ 関連論文および文献などを読む時間的余裕を持つことができること。

評価方法

- ① 授業における平常点
- ② 授業内レポート・報告・質疑応答・期末試験などによる評価

テキスト

- ① 黒沢義孝『格付け講義』文眞堂
- ② その他参考文献については授業時に指示する

授業概要

(1～8 回) 仕組みを講じた金融商品（ストラクチャードファイナンス商品）の実例と発展過程ならびに格付会社による格付手法について講義する。証券化商品、仕組債を含む、ストラクチャードファイナンスの理論と実態ならびに格付会社による格付手法について、実例を踏まえながら、講義する。講義の中で今後研究を深める余地のある分野の特定および考えられ得る政策提言について触れる。

(9～16 回) 金融機関の格付け分析手法について、主要項目の概要を講義する。銀行を中心とするが、証券会社、ノンバンクも対象とする。格付けの基本となる経済、産業リスクの評価手法、各金融機関の事業リスク、財務リスクの評価、政府支援の評価、親会社の支援について、また金融機関が発行する様々な債券の格付けと資本性の評価などについて、実例に基づいて考察し、格付け会社間での評価手法の違い、また格付けが金融市場に与える影響についても講義する。授業中、受講学生の研究テーマに対応した研究論文について適宜取り上げ講義する。なお、講義中、受講学生に課題を課して発表してもらうことがある。

授業計画

担当者 江川由紀雄

第1回	ストラクチャードファイナンスの実際
第2回	仕組みとリスク 法的リスク、当事者の役割、トランシェ分けの実際
第3回	リスクの評価手法 代表的な評価手法とその限界
第4回	格付会社による格付手法 商品類型別、格付会社別の傾向
第5回	証券化取引の発展過程 日本を中心に
第6回	金融危機に関連して指摘された問題点とその考察
第7回	先行研究の傾向と論点整理
第8回	今後の発展の方向性 日本の金融システムにおける位置付けの考察

担当者 根本直子

第9回	金融機関の格付け手法。経済リスク、産業リスクの評価
第10回	ソブリン格付けと金融機関格付けの関係。政府支援の考え方
第11回	銀行の事業リスク評価。コーポレートガバナンス、会計制度
第12回	銀行の財務リスク評価。自己資本と資産の質
第13回	銀行の財務リスク評価。収益性と資金調達、流動性
第14回	銀行が発行する債券の評価。親会社の支援について
第15回	証券会社、ノンバンクの信用力評価の手法
第16回	格付け会社の手法の違い、格付けが銀行や資本市場に与える影響

到達目標

格付けの規準、意味について正確な理解と批判力を持つ。
格付け規準や分析手法を学ぶことで、自己の分析力を広げる。

履修上の注意及び予習・復習

日本国内における実例を踏まえた内容とするが、参考資料として利用する文献には英文によるものも含まれるため、ある程度の英文読解力が期待される。履修者には、積極的な質問および対話を求める。

評価方法

(江川) 平常評価 (60%)、課題設定と提出レポート (40%)
(根本) 授業での平常評価と課題提出物の総合評価。
前半・後半の成績を総合的に判定する。

テキスト

(江川)
授業の過程で適宜指示する。参考文献：江川 由紀雄『サブプライム問題の教訓—証券化と格付けの精神』(商事法務)

(根本)
授業で適時提示する。参考文献：根本直子著「残る銀行、沈む銀行—金融危機後の構図」

東洋経済新報社

S&P 「日本の金融業界 2007」東洋経済新報社

授業概要

信用リスク分析に対する基本的な心がけ、信用リスクを忠実に捉えるための分析フレームワーク、格付評価の理論と実務（特に信用リスク評価の精度を大きく左右する定性分析に重点を置く）、格付会社・格付けの本質と限界について考察する。また、信用リスク分析を通して企業・産業・経済の実態を客観的に検証できる目を養うことを目指す。さらに、ソブリン格付けに関する専門的な知識・技能を習得することをはじめとして、昨今の金融市場におけるソブリン債問題とその格付け動向等を踏まえてソブリン債格付けの本質・性格について講義する。加えて、日本等の財政問題の実例をもとに、ケース・スタディを実施するなど、より現実の金融市場におけるソブリン債の格付けの本質を、実践に即して講義する。

授業計画

担当者 森田隆大

第1回	総論 ～ 格付けの本質と限界
第2回	信用リスク分析の基本的概念とフレームワーク
第3回	マクロ環境・業界分析
第4回	個別企業の定性分析
第5回	個別企業の定量分析
第6回	個別企業の流動性分析とその他の分析要因
第7回	信用リスクの比較評価
第8回	個別債務のリスク分析

担当者 江夏あかね

第9回	ガイダンス
第10回	国（ソブリン）のクレジットに焦点が当たる背景
第11回	ソブリンの信用分析の基礎
第12回	ソブリン格付けの動向等—国際的な観点を踏まえて
第13回	ソブリンCDSの基礎
第14回	日本ソブリンのクレジットの行方（1）
第15回	日本ソブリンのクレジットの行方（2）
第16回	レポートの講評及びまとめ

到達目標

信用リスク分析を通して企業・産業・経済の実態を客観的に検証できる目を養うことを目指す。財務諸表基礎分析能力を養成する。

履修上の注意及び予習・復習

上記の進行を予定しているが、講師の都合によって変更される場合があるので、毎回の授業においてスケジュールを確認しておくこと。また、授業中の私語は厳禁。受講態度に問題がある場合、退室を指導することがある。

評価方法

（森田）出席および授業参加度（60%）
提出レポート（40%）
（江夏）レポートで評価する。
前半・後半の成績を総合的に判定する。

テキスト

（森田）

参考テキスト 森田隆大（2010）「格付けの深層」日本経済新聞出版社
山内直樹・森田隆大（2010）『信用リスク分析—総論』金融財政事情研究会

（江夏）

江夏あかね『日本の復興と財政再建への道』学文社、¥2,730、978-4-7620-2248-7
その他適宜資料を配布する

授業概要

博士論文の作成のための方法論、基本知識を習得する。このため、以下を指導する。

- ① 論文テーマの問題設定の明確化とテーマの絞り込み。
- ② テーマの問題設定のための広範囲な関連文献収集とその理解。
- ③ 論文の作成についての先行研究の論点の整理。

授業計画

第1回	受講学生の問題意識の確認	第17回	博士論文の方法論の提起
第2回	大まかな論文テーマ分野の現状分析	第18回	博士論文の構成の作成
第3回	テーマに関連した基本文献収集	第19回	論文構成のための文献整理と収集
第4回	基本的な基本研究文献の報告	第20回	文献の考察と報告
第5回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第21回	文献の考察と報告・討論
第6回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第22回	文献の考察と報告・討論
第7回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第23回	文献の考察と報告・討論
第8回	基本的な基本研究文献の報告・討論	第24回	文献の考察と報告・討論、論理構成
第9回	論文のテーマの絞り込み	第25回	文献の考察と報告・論理構成考察
第10回	論文テーマの先行研究文献の作成	第26回	研究中間的まとめ
第11回	先行研究文献の報告	第27回	研究中間的まとめ
第12回	先行研究文献の報告・討論	第28回	研究中間的まとめ
第13回	先行研究文献の報告・討論	第29回	研究中間的まとめ
第14回	先行研究文献の報告・討論	第30回	研究中間的まとめ
第15回	先行研究文献の報告・討論	第31回	研究中間的まとめ
第16回	研究成果の報告（論点整理）	第32回	研究成果の報告

到達目標

問題意識の明確化による先行研究文献を読了し、論文テーマを絞り込み、論文の構成（論理展開）を作成する。

履修上の注意及び予習・復習

自ら課題に対して問題内容の明確化に努め、研究文献に対する批判力を養うこと。

評価方法

授業による報告と研究の進捗状況の総合評価。

テキスト

学生のテーマに即して適宜指示する。

授業概要

三年間で論文を完成させるための準備を進める

- ① 論文テーマの設定（基本的には本人の研究計画による）
- ② 既存研究のサーベイと論点整理及び史料の探索
- ③ 論点毎の研究報告
- ④ ①、②、③に基づいた論文の構成に関する一次案の作成

授業計画

第1回	論文テーマの設定に関する意見交換	第17回	文献リストの追加・修正
第2回	同上	第18回	新しい文献リストに関する報告
第3回	同上	第19回	論点毎の研究の報告
第4回	先行研究のサーベイ	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	基本文献リストの作成	第23回	同上
第8回	基本文献リストに関する報告	第24回	史料の探索
第9回	主要な論点の確認	第25回	同上
第10回	同上	第26回	同上
第11回	同上	第27回	史料に関する報告
第12回	同上	第28回	第一次論文構成案の作成
第13回	史料の探索	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	年度前半の研究成果の報告	第32回	年度後半の研究成果の報告

到達目標

- ・三年間で論文を完成させるために、年度前半に、研究テーマを確定し、既存研究のサーベイとそれに基づいた論点整理、史料の探索などを進め、年度末には論文の構成について第一次案をまとめる。
- ・史料の所在やアクセス可能性を早期に見極める。

履修上の注意及び予習・復習

- ・研究指導の教員に過度に依存せず、主体的に研究に取り組むことが重要である
- ・経営史学会は大学院生を会員として受け入れているので同学会の会員となることを薦める。部会や年次大会などへ参加して、外部の研究者や院生と交流する機会を持つことにより、研究意欲を高く保つことを求めたい。

評価方法

- ・研究の進捗状況と報告の内容

テキスト

文献リストの作成をサポートする過程で多くの参考文献を推奨することになるであろう。テキストは用いない。

授業概要

博士論文作成のための基本的な知識を習得する。

- ① 信用リスクに関連する先行研究論文の精読
- ② 格付けに必要なミクロ・マクロ経済、財務データ分析、統計分析の習得
- ③ 模擬格付け分析（社債およびソブリン国債）

以上の3点を進めながら論文作成テーマを絞り込む

授業計画

第1回	オリエンテーション	第17回	博士論文の構成の作成（1）
第2回	受講学生の問題意識の把握（議論）	第18回	博士論文の構成の作成（2）
第3回	先行研究論文の報告（1）	第19回	博士論文の構成の作成（3）
第4回	先行研究論文の報告（2）	第20回	論文構成に必要な文献整理（1）
第5回	先行研究論文の報告（3）	第21回	論文構成に必要な文献整理（2）
第6回	先行研究論文の報告（4）	第22回	論文構成に必要な文献整理（3）
第7回	先行研究論文の報告（5）	第23回	論文構成に必要な文献整理（4）
第8回	論文テーマ絞り込みのための討議	第24回	論文構成に必要な文献整理（5）
第9回	ミクロ経済についての課題演習	第25回	研究の中間的なとりまとめ（1）
第10回	マクロ経済についての課題演習	第26回	研究の中間的なとりまとめ（2）
第11回	財務データ分析についての課題演習	第27回	研究の中間的なとりまとめ（3）
第12回	統計分析についての課題演習	第28回	研究の中間的なとりまとめ（4）
第13回	模擬格付け分析演習（社債）	第29回	研究の中間的なとりまとめ（5）
第14回	模擬格付け分析演習（ソブリン国債）	第30回	研究の中間的なとりまとめ（6）
第15回	演習成果報告（1）	第31回	研究成果の報告・討議（1）
第16回	演習成果報告（2）	第32回	研究成果の報告・討議（2）

到達目標

論文作成に関連する先行研究を熟知し、必要な文献を整理する。
博士論文テーマの中間的なとりまとめを行う。

履修上の注意及び予習・復習

必要な関連知識（経済・財務・統計など）を十分習得しておくこと。
内容の濃い論文、長編の研究図書を時間をかけて熟読すること。

評価方法

授業における演習および研究成果の報告などによって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

21世紀型の経営組織についての基本文献を広く紹介して、批判的な検討を行ってもらおう。とくに多様な専門職が分業と協業を工夫するKnotworking型の経営組織に注目する。また経営組織を基礎から理解し、変革するために手がかりになる理論を、活動理論を中心にしながら、学んでいく。そうした学習を手がかりにしながら、学生が個々にオリジナルな視点を育て、テーマを確定し、論文としてまとめていく基礎作りをする。

授業計画

第1回	受講学生の問題関心の確認	第17回	博士論文の構成の作成
第2回	問題に見合った文献のリストの作成	第18回	同上
第3回	基本的な文献に関する報告	第19回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	同上	第20回	文献に関する報告
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	論文のテーマの絞り込み	第24回	同上
第9回	テーマに即した文献リストの作成	第25回	同上
第10回	文献に関する報告	第26回	研究の中間的なとりまとめ
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究成果の報告	第32回	研究成果の報告

到達目標

論文作成に必要な基本的な文献を収集し、読了すること。
大まかに全体の1/3程度の完成度をめざすこと。

履修上の注意及び予習・復習

自ら積極的に課題を設定し調査研究を行うこと。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

受講生が、グローバル化時代の財務会計研究に必要な「理論と実証分析」に関する知識と技法を身につけ、その成果を3年後に博士論文としてまとめることを到達目標とする。この目標に向けた研究行程表（ロードマップ）を、指導教員と打ち合わせながら6月中に作成する。行程表の時間軸に沿って先行研究のレビューを進め、毎週ゼミで報告する。その際、既存の研究成果を一定の座標軸（論点や分析視点）を設けて整理し評価を加える。実証分析で統計学的手法を用いる場合には、その技法の習得を並行して進める。年度末までには、研究のコア部分（理論モデル・仮説体系）の構築にこぎつける。

授業計画

第1回	受講生の問題関心の確認	第17回	博士論文の構成（章建て）の作成
第2回	テーマに関連する文献リストの作成	第18回	同上
第3回	基本的な文献に関する報告	第19回	論文構成に即した先行研究文献の整理
第4回	同上	第20回	章建てに沿った先行研究のレビュー
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	博士論文のテーマの絞り込み	第24回	同上
第9回	研究行程表（ロードマップ）の作成	第25回	同上
第10回	テーマに即した先行研究文献の整理	第26回	研究の中間的なとりまとめ
第11回	先行研究のレビュー	第27回	研究行程表の再検討
第12回	同上	第28回	研究のコア部分（理論・仮説体系）の構築
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究成果の報告	第32回	コア部分に関する研究成果の報告

到達目標

- ・博士論文作成に必要な文献を収集し、論文構成（章建て）に沿って整理・読了すること。
- ・研究のコア部分（理論モデル・仮説体系）を構築すること。
- ・実証分析で統計学的手法を用いる場合には、その技法の習得を並行して進めること。

履修上の注意及び予習・復習

先行研究のレビューに当たっては、既存の研究成果を平板に報告するのではなく、受講生が独自に設定した座標軸（論点や分析視点）に沿って整理し評価を加えること。

評価方法

- ・受講状態（質疑応答など授業への参加姿勢が積極的かどうか）40%
- ・レポート報告（文献に関する報告や研究成果の報告の優劣）60%

テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業中に適宜指示する。

授業概要

博士論文の作成は周到な準備と過程を経る必要があり、体系的な取り組みができるよう各過程で具体的な指導を行う。まず、企業情報開示に関連する基本的な文献をテキストとして、開示制度や実態の動向を改めて把握し、基礎的な理論の復習を行う。院生は割り当てられた範囲を報告し、これについて討論する。また修士論文の課題や分析の方法についても検討と報告を行い、さらに博士論文の具体的なテーマ設定の問題意識の明確化を図る。学期末にこれらを加筆した報告論文を提出する。

授業計画

第 1 回	受講生の研究テーマの確認	第 17 回	先行研究の論点整理と課題
第 2 回	修士論文の内容報告と検討	第 18 回	新たな参照資料・文献の収集
第 3 回	既存の学位論文のリスト作成	第 19 回	博士論文の構成案の提示と検討
第 4 回	// の読み込み	第 20 回	同上
第 5 回	同上	第 21 回	参照する先行論文に関する報告
第 6 回	同上	第 22 回	同上
第 7 回	既存の学位論文の内容整理	第 23 回	同上
第 8 回	研究の構想・テーマの提示	第 24 回	同上
第 9 回	// の検討	第 25 回	参照先行論文の有用性の検討
第 10 回	主な先行研究文献のリスト作成	第 26 回	中間報告の事前準備
第 11 回	// の内容検討	第 27 回	中間報告の検証と課題
第 12 回	同上	第 28 回	研究の独自性を検討
第 13 回	同上	第 29 回	論文執筆の行程の提示
第 14 回	同上	第 30 回	// の検討
第 15 回	先行研究の成果と意義	第 31 回	作成した報告論文の提示
第 16 回	これまでのまとめ	第 32 回	// の検討

到達目標

論文作成に向けた問題意識を明快にし、基本文献を収集し、読了し、レジュメする。

履修上の注意及び予習・復習

指示された課題について指示のあった日時に報告し、自らの問題意識をもって臨むこと

評価方法

課題に対する報告の内容、資料・文献の整理、研究の進行度によって評価する

テキスト

必要に応じて紹介する

授業概要

博士論文の作成のためには、1年次の時点で明確なテーマの設定とその分析のための方法論を定めて、基本的文献や資料・データを収集するための作業を開始できていること(とりわけ前者)が不可欠である。したがって、各自がどのようなテーマを選ぶのか、そのテーマの研究上の意義は何か、そのテーマを追求するための方法論としてどのような選択肢があるのか等を中心に議論し、博士論文作成のための基礎作りをおこなう。

授業計画

第1回	はじめに	第17回	先行研究の収集と検討
第2回	これまでに蓄積された研究の報告	第18回	先行研究の収集と検討
第3回	これまでに蓄積された研究の検討	第19回	先行研究の収集と検討
第4回	これまでに蓄積された研究の検討	第20回	先行研究の収集と検討
第5回	これまでに蓄積された研究の検討	第21回	先行研究の収集と検討
第6回	テーマの設定のための検討	第22回	先行研究の収集と検討
第7回	テーマの設定のための検討	第23回	分析の方法論の明確化のための検討
第8回	テーマの設定のための検討	第24回	分析の方法論の明確化のための検討
第9回	テーマの分析のための方法論の検討	第25回	分析の方法論の明確化のための検討
第10回	テーマの分析のための方法論の検討	第26回	分析の方法論の明確化のための検討
第11回	テーマの分析のための方法論の検討	第27回	分析の方法論の明確化のための検討
第12回	テーマの分析のための方法論の検討	第28回	分析の方法論の明確化のための検討
第13回	テーマの分析のための方法論の検討	第29回	分析の方法論の明確化のための検討
第14回	テーマの分析のための方法論の検討	第30回	分析の方法論の明確化のための検討
第15回	テーマの分析のための方法論の検討	第31回	分析の方法論の明確化のための検討
第16回	前半の研究成果の報告	第32回	1年間の研究成果の報告

到達目標

テーマ設定と方法論明確化に必要な先行研究のフォロー。
テーマ設定と方法論の明確化。

履修上の注意及び予習・復習

現実感覚を大切に研究を心がけること。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

博士論文作成のために必要となる理論を習得する。その上で、先行研究を収集し先行研究の到達点と残された課題を明確にして、そのなかから自分のもっとも関心のあるテーマを選ぶように指導する。学習の範囲は広く構え、関連分野を多く学習するように指導するが、論文のテーマは明確で絞り込まれたものになるように指導する。研究テーマについて多くの人が関心を共有できるものであるために、研究テーマが学界の研究状況における意味と同時に社会的に持つ意味を常に考えて研究するように指導する。

授業計画

第1回	受講学生の問題関心の確認	第17回	博士論文の構成の作成
第2回	問題に見合った文献のリストの作成	第18回	同上
第3回	基本的な文献に関する報告	第19回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	同上	第20回	文献に関する報告
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	論文のテーマの絞り込み	第24回	同上
第9回	テーマに即した文献リストの作成	第25回	同上
第10回	文献に関する報告	第26回	研究の中間的なとりまとめ
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究成果の報告	第32回	研究成果の報告

到達目標

論文作成に必要な基本的な文献を収集し、読了すること。
大まかに3分の1程度の完成度を旨すこと。

履修上の注意及び予習・復習

自ら積極的に課題を設定し調査研究を行うこと。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

博士論文の作成のための基礎知識、及び方法論を習得する。そのため次のような指導を行なう。

1. 論文テーマにおける問題の設定を明確化し、研究テーマを絞り込む。
2. 論文テーマの問題の設定のための関連文献、先行研究の調査・収集とその分析を行なう。
3. 博士論文の作成についての先行研究の主要な論点を整理する。

授業計画

第1回	受講院生の問題意識の確認	第17回	博士論文の方法論についての指導
第2回	論文の大まかなテーマに関する現状	第18回	博士論文の編別構成
第3回	論文テーマに関連する基本文献調査	第19回	論文作成のための文献整理と収集
第4回	基本文献の報告	第20回	文献の検討と報告
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	同上
第9回	論文テーマの絞り込み	第25回	同上
第10回	先行研究の文献リストの作成	第26回	研究の中間的なまとめ
第11回	先行研究の報告	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究報告と論点整理	第32回	研究成果の報告

到達目標

問題意識を明確化することにより先行研究を検討し、論文のテーマを絞り込んで、論文の編別構成を作成する。

履修上の注意及び予習・復習

自ら課題に対して問題およびその内容を明確にし、先行研究に対する批判的検討ができるようになること。

評価方法

講義における報告と研究の進展により総合的に評価する。

テキスト

院生の研究テーマにそくして適宜指示する。

授業概要

博士論文作成のための方法論、基本知識を習得する。

- ① 論文テーマに関する問題設定とテーマの絞り込み。
- ② 基本的な文献収集とその理解。
- ③ 論文テーマにそった先行研究の論点の整理。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	受講生の問題意識の確認	第1回	博士論文の構成と作成方法
第2回	論文テーマに関しての大まかな検討	第2回	博士論文の構成と作成方法
第3回	論文テーマに関しての基本文献調査	第3回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	基本文献の報告	第4回	文献の検討と報告
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	同上
第8回	同上	第8回	同上
第9回	論文テーマの絞り込み	第9回	研究の中間的なとりまとめ
第10回	先行研究の文献リストの作成	第10回	同上
第11回	先行研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	同上
第15回	研究報告と論点整理	第15回	研究成果の報告

到達目標

論文テーマに基づいた先行研究を検証することで、自らの研究との差異を理解することを目標とする。

履修上の注意及び予習・復習

問題意識のもとに設定する論文テーマに基づいた先行研究などの研究文献を丹念に調べ、学ぶと共に、それに関する報告ができるようにする。

評価方法

報告と積極的な議論への参加を総合的に評価する。

テキスト

研究テーマに即して、指示する。

授業概要

後期課程における研究指導は、博士論文の作成の指導を行うことがメインとなる。履修者は、早期に自己の研究テーマを租税法の広い分野の中から選定し、博士論文作成に向けた研究を開始しなければならない。テーマは修士論文を発展させるものが望ましいが、これとは別に新たに設定することも可能である。授業はゼミナール形式で行うこととし、履修者各人の個別研究発表を主体とする。受講者には各テーマに応じた基本文献や重要判決例を提示するが、自らこれまでの租税法研究者の先行研究を徹底的にリサーチすることが望まれる。この他、隣接分野の研究、さらに英語又はドイツ語の勉強を重ねることも重要である。

なお、3年間で博士論文を書き上げるために、1年次において2本程度の個別研究論文を書き上げることを目標とする。

授業計画

第1回	受講生の研究テーマの確認	第17回	博士論文の目次の作成
第2回	文献リスト作成	第18回	研究成果の報告
第3回	仮目次の作成	第19回	同上
第4回	先行研究の報告	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	研究テーマの絞り込み	第24回	中間とりまとめ
第9回	研究テーマに関する文献リスト作成	第25回	研究成果の報告
第10回	研究成果の報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	学術論文の報告と指導(1)	第31回	学術論文の報告と指導(3)
第16回	学術論文の報告と指導(2)	第32回	学術論文の報告と指導(4)

到達目標

- ・20,000字程度の学術論文を2本執筆すること。

履修上の注意及び予習・復習

- ・文献の積極的な収集と読み込みを行うこと。
- ・毎回研究の進行状況を適切に報告するとともに、指示に従うこと。

評価方法

- ・授業中の報告と研究の進捗によって評価する

テキスト

- ・研究テーマにより適宜指示する。

授業概要

ヘルスケアサービスの基本的な特徴について理解を深められるよう指導する。保健・医療・福祉・介護各分野の連携および連続性によりヘルスケアサービス提供がなされていることを理解する。ヘルスケアサービスは、基本的には供給側も消費側も人間であるヒューマンサービスが基本であることについて指導する。患者および患者家族と医療者関係、他職種によるチーム医療など、信頼関係やコミュニケーションが深く関わっていることについても理解を深める。他のサービスとの違いと共通点についてまとめ、ヘルスケアサービス研究の基礎力を醸成できるよう指導する。

授業計画

第1回	ヘルスケアサービス種別ごとの理解	第17回	博士論文の構成の作成
第2回	保健・医療・福祉・介護各分野の連携についての理解	第18回	同上
第3回	ヒューマンサービスについての理解	第19回	論文構成に必要な文献の整理
第4回	医療者－患者・家族関係の理解	第20回	文献報告（1）
第5回	課題の抽出および関心領域の絞り込み	第21回	文献報告（2）
第6回	文献検討（1）	第22回	文献報告（3）
第7回	文献検討（2）	第23回	文献報告（4）
第8回	文献検討（3）	第24回	研究の中間的なとりまとめ
第9回	論文テーマの設定	第25回	同上
第10回	研究デザインの検討	第26回	同上
第11回	論文テーマに必要な文献リスト作成	第27回	同上
第12回	文献分析（1）	第28回	同上
第13回	文献分析（2）	第29回	同上
第14回	文献分析（3）	第30回	同上
第15回	文献分析（4）	第31回	研究成果の報告
第16回	研究成果報告	第32回	研究成果の見直し

到達目標

- ・論文作成のための基本的な知識の習得。
- ・論文作成に必要な文献の収集および文献検討ができる。
- ・研究デザインの構築。

履修上の注意及び予習・復習

自分の関心あるテーマについての絞り込みができ、また深く考察できるよう、学習内容の振り返りを習慣化して欲しい。

評価方法

課題設定能力、文献分析能力等を総合的に評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

博士論文作成のための学術論文の報告に向けて研究指導する。このため以下を指導する。

- ① 論文テーマの問題内容（論点）の一層の明確化をする。
- ② テーマの問題意識、先行研究の内容・方法と自己の研究内容・方法の違いの明確化。
- ③ 論文発表のための参考文献・先行研究論文の整理を行う。
- ④ 論文作成技法を育成する。

授業計画

第1回	学術論文としてのテーマの明確化	第17回	論文の作成・報告・討論
第2回	学術論文の論理展開（論文構成）作成	第18回	論文の作成・報告・討論
第3回	論文構成に即して研究報告	第19回	論文の作成・報告・討論
第4回	論文構成に即して研究報告・討論	第20回	論文の作成・報告・討論
第5回	論文構成に即して研究報告・討論	第21回	論文の作成・報告・討論
第6回	論文構成に即して研究報告・討論	第22回	論文の作成・報告・討論
第7回	論文構成に即して研究報告・討論	第23回	論文の作成・報告・討論
第8回	論文構成に即して研究報告・討論	第24回	研究報告
第9回	論文構成に即して研究報告・討論	第25回	論文の構成・検討・修正
第10回	論文構成に即して研究報告・討論	第26回	論文の作成・報告
第11回	先行研究と自己の研究の再考究	第27回	論文の作成・報告
第12回	必要な文献・調査ヒアリング補強	第28回	論文の作成・報告
第13回	必要文献・調査ヒアリング補強の報告	第29回	論文の作成・報告
第14回	必要文献・調査ヒアリング補強の報告	第30回	論文の作成・報告
第15回	必要文献・調査ヒアリング補強の報告	第31回	論文の作成・報告
第16回	研究報告	第32回	学術論文として草稿提出

到達目標

博士論文の学術草稿論文提出。自己の論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意及び予習・復習

自ら批判的に学術論文を考究する。

評価方法

作成した学術論文草稿の提出物による。

テキスト

学生のテーマに即して適宜指示する。

授業概要

初年度に作成した論文構成の一次案に基づいて、

- ① 主要な論点に関して小論文をまとめる作業を通じて、
- ② 論文構成を見直すと共に、
- ③ 第一次稿をまとめ、その検討を行って
- ④ 年度末までに、第二次稿を書き上げる

年度後半に、論文の全部ないし完成度の高い部分について、対外発表（学会関東部会報告など）を行う。

授業計画

第1回	主要な論点毎の小論文の作成	第17回	第一次稿の執筆開始
第2回	同上	第18回	第一次稿に関する報告
第3回	同上	第19回	同上
第4回	同上	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	同上
第9回	同上	第25回	同上
第10回	文献・史料面の問題点の確認	第26回	第一次稿のとりまとめ
第11回	同上	第27回	第一次稿の検討
第12回	論文構成第二次案の検討開始	第28回	同上
第13回	論文構成第二次案の検討	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	対外発表
第16回	論文構成第二次案の完成	第32回	第二次稿のとりまとめ

到達目標

- ・年度前半にまず、主要な論点に関する小論文をまとめてもらう。次に各小論文のレベル、文献・史料面での問題点を確認し、第16回には論文の目次構成の第二次案を完成させる。
- ・年度後半は、年度前半でまとめた小論文とその検討結果を活用して、博士論文の第一次稿の執筆を開始してもらう。一次稿の完成後、直ちにその検討・修正を行って、年度末には第二稿を書き終えることとする。

履修上の注意及び予習・復習

- ・二次稿全体或いは完成度の高いその一部について、経営史学会の関東部会などを利用して、対外発表を実施し、学外の研究者や院生と討論する機会を持つ。

評価方法

研究の進捗状況

テキスト

なし

授業概要

博士論文の前提となる学術論文（最終論文の一部を構成する論文）を公刊誌に掲載発表するための研究指導を行う。

- ① 論文テーマの吟味（新規性・実際性・適切性）
 - ② 理論構成の検討（既存理論との関連・理論の整合性）
 - ③ 実証分析の妥当性（分析手法・結果の妥当性）
- などを精査した上で学術論文をまとめ公刊する。

授業計画

第1回	学術論文テーマの吟味	第17回	論文の作成・報告（1）
第2回	学術論文の理論構成の検討	第18回	論文の作成・報告（2）
第3回	学術論文の実証分析の妥当性	第19回	論文の作成・報告（3）
第4回	論文構成の報告（1）テーマ	第20回	論文の作成・報告（4）
第5回	論文構成の報告（2）理論	第21回	論文の作成・報告（5）
第6回	論文構成の報告（3）理論	第22回	論文の作成・報告（6）
第7回	論文構成の報告（4）実証分析	第23回	論文の作成・報告（7）
第8回	論文構成の報告（5）実証分析	第24回	論文全体の報告
第9回	研究内容の見直し（1）	第25回	研究内容の見直し（4）
第10回	研究内容の見直し（2）	第26回	研究内容の見直し（5）
第11回	研究内容の見直し（3）	第27回	見直し後の論文の作成・報告（1）
第12回	関連文献の補強・再調査（1）	第28回	見直し後の論文の作成・報告（2）
第13回	関連文献の補強・再調査（2）	第29回	見直し後の論文の作成・報告（3）
第14回	研究報告（1）	第30回	見直し後の論文の作成・報告（4）
第15回	研究報告（2）	第31回	見直し後の論文の作成・報告（5）
第16回	研究報告（3）	第32回	学術論文提出・学術誌への掲載公刊

到達目標

博士論文の前提となる学術論文（最終論文の一部を構成する論文）を学術誌に掲載発表する。

履修上の注意及び予習・復習

論文作成の進捗ごとに緻密な研究指導を受けること。

評価方法

作成した学術論文を評価する。

テキスト

必要の都度、指示する。

授業概要

学生が選んだ初期段階のテーマを大事にし、先行研究を踏まえ、テーマについて深堀をしていく。研究テーマは経営組織と関わるので、具体的な事例にこだわることを大事にする。さらに可能であれば、具体的な経営組織を選んで、参与観察してみる。そのうえで、研究活動から得た成果を論文にまとめ、学術雑誌に投稿する。これはいずれ学位論文の参考論文として位置づけられるだろう。

授業計画

第1回	学術論文のテーマを明確にする	第17回	論文の作成・報告
第2回	学術論文の構成の作成	第18回	同上
第3回	構成に即して順次研究報告	第19回	同上
第4回	同上	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	研究報告
第9回	同上	第25回	研究の見直し
第10回	同上	第26回	論文作成・報告
第11回	研究の見直し	第27回	同上
第12回	必要文献の補強	第28回	同上
第13回	文献報告	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究報告	第32回	学術論文提出

到達目標

博士論文提出の前提となる学術論文の提出。
 関連文献の理解。
 論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意及び予習・復習

自ら考え、工夫し、判断して研究を進め、研究指導を受けること。

評価方法

作成した学術論文による。

テキスト

学生のテーマに応じて適宜指示する。

授業概要

博士論文提出の前提となる学術論文の作成に向けて研究指導を行う。

受講生は、研究の進捗状況を踏まえて、まず行程表のアップグレードを行う。現代の財務会計研究では問題発見と仮説構築の能力が問われるから、研究テーマに関連する問題の発見と定式化および仮説体系の構築が適切に行われていることを確認する。前半は理論的な考察を深めることに重点を置き、先行研究に独自の知見を加えることに努める。後半は有価証券報告書等の開示情報や株価データを素材にした統計的分析やケース・スタディなど実証分析のウエイトを増していく。また、学会やワークショップに参加し、研究成果を発信していく。そのため、日本会計研究学会等に「院生会員」として入会する。

授業計画

第1回	研究の進捗状況の確認	第17回	学術論文の作成・報告
第2回	研究行程表のアップグレード	第18回	同上
第3回	学術論文のテーマの設定	第19回	同上
第4回	学術論文の構成（目次）の作成	第20回	実証分析に関する構想の作成
第5回	論文構成に沿った研究報告	第21回	実証分析の経過報告
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	研究成果の報告（実証部分を中心に）
第9回	同上	第25回	研究行程表の見直し
第10回	学術論文のテーマの絞り込み	第26回	学術論文の作成・報告
第11回	研究行程表の見直し	第27回	同上
第12回	必要文献の補強	第28回	同上
第13回	文献報告	第29回	外部研究者を交えた学術論文の発表会
第14回	同上	第30回	発表会を踏まえた学術論文の修正
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究成果の報告（理論部分を中心に）	第32回	学術論文の提出

到達目標

- ・ 博士論文提出の前提となる学術論文の提出。
- ・ 研究テーマに関連する問題の発見と定式化および仮説体系の構築が適切に行われていること。
- ・ 理論と実証の各面で、先行研究に独自の知見（オリジナリティ）を加えること。
- ・ 学会やワークショップに参加し、研究成果を発信していくこと。

履修上の注意及び予習・復習

- ・ 研究の進捗状況を踏まえて、逐次、研究行程表のアップグレードを行うこと。
- ・ 会計研究の歴史的蓄積を踏まえつつ、自ら主体的に判断して研究を進めること。

評価方法

学術論文の完成度および授業への参加姿勢に応じて評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業中に適宜指示する。

授業概要

院生は博士論文のテーマに関連する先行文献や資料を収集し、その整理を行い、博士論文の作成に適切かどうかを検討し、不十分な論点や新たな研究課題を見出して、博士論文の独自性を高める。さらに博士論文の骨格となる基本的な構成を作成し、博士論文の主要部分を順次、執筆する。執筆原稿の報告、それに対するコメントを受ける作業を重ね、第1稿を作成する。論文の一部を学術論文として学内紀要/学術雑誌に投稿、または関連学会で発表する。学期末に、そこで得たフィードバックを反映した第2稿を提出する。

授業計画

第1回	学術論文のテーマを明確にする	第17回	論文第1稿の報告
第2回	学術論文の構成(目次)の作成	第18回	同上
第3回	構成に沿って研究報告	第19回	同上
第4回	同上	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	論文第1稿の中間総括
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	同上
第9回	同上	第25回	論文第1稿の発表・報告
第10回	研究報告の中間総括(1)	第26回	同上
第11回	同上	第27回	投稿/発表向け学術論文原稿の提示
第12回	同上	第28回	// の検証
第13回	同上	第29回	論文第2稿の報告
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究報告の中間総括(2)	第32回	論文第2稿提出

到達目標

博士論文の前提になる学術論文の提出

履修上の注意及び予習・復習

研究の方法や分析の視点を獲得し、積極的な仮説の設定と検証などに取り組むこと

評価方法

学術論文、期末の論文第2稿で評価する

テキスト

テーマに即して指示する

授業概要

1年次に確立したテーマ設定と方法論は一般には抽象的にとどまる場合が多い。したがって2年次にはこれを具体化して博士論文にまで結びつけるための作業をおこなう。そのためには、実際に論文を書いて、他人の言葉ではなく自分の言葉で表現することが大切である。会話だけでなく、原稿をベースとした検討をおこなう。

授業計画

第1回	はじめに	第17回	はじめに
第2回	博士論文の章別構成の提示	第18回	博士論文の章別構成の修正・提示
第3回	必要な資料・データの明確化	第19回	不足している資料・データの明確化
第4回	収集された資料・データの検討	第20回	収集された資料・データの検討
第5回	収集された資料・データの検討	第21回	収集された資料・データの検討
第6回	収集された資料・データの検討	第22回	収集された資料・データの検討
第7回	収集された資料・データの検討	第23回	収集された資料・データの検討
第8回	収集された資料・データの検討	第24回	収集された資料・データの検討
第9回	博士論文原稿の執筆と検討	第25回	博士論文原稿の執筆と検討
第10回	博士論文原稿の執筆と検討	第26回	博士論文原稿の執筆と検討
第11回	博士論文原稿の執筆と検討	第27回	博士論文原稿の執筆と検討
第12回	博士論文原稿の執筆と検討	第28回	博士論文原稿の執筆と検討
第13回	博士論文原稿の執筆と検討	第29回	博士論文原稿の執筆と検討
第14回	博士論文原稿の執筆と検討	第30回	博士論文原稿の執筆と検討
第15回	博士論文原稿の執筆と検討	第31回	博士論文原稿の執筆と検討
第16回	前半の研究成果の報告	第32回	後半の研究成果の報告

到達目標

博士論文の全体像あるいはコンセプトを確立する能力の獲得。
先行研究や資料・データを咀嚼して、自分の言葉で表現できる能力の獲得。

履修上の注意及び予習・復習

現実感覚を大切に研究を心がけること。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

学術論文の作成と発表を目標として指導を行う。この論文は博士論文の前提となる論文なので、この論文の深化・拡充したものが博士論文となることを前提として作成する。先行研究の到達点と問題点を検討し明確にする。このプロセスを経て、自分の問題関心を絞り込み、それまでの研究の進展を踏まえて論文作成可能なテーマを立て、論文を作成する。論文の構成の妥当性、推論の合理性、結論の意味を明確になるように指導する。また、論文作成上の必要なルールを身につけるように指導する。

授業計画

第1回	学術論文のテーマを明確にする	第17回	論文の作成・報告
第2回	学術論文の構成（目次）の作成	第18回	同上
第3回	構成に即して順次研究報告	第19回	同上
第4回	同上	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	研究報告
第9回	同上	第25回	研究の見直し
第10回	同上	第26回	論文作成・報告
第11回	研究の見直し	第27回	同上
第12回	必要文献の補強	第28回	同上
第13回	文献報告	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究報告	第32回	学術論文提出

到達目標

- ・博士論文提出の前提となる学術論文の提出。
- ・関連文献の理解。
- ・論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意及び予習・復習

自ら考え、工夫し、判断して研究を進め、研究指導を受けること。

評価方法

作成した学術論文による。

テキスト

学生のテーマに応じて適宜指示する。

授業概要

博士論文の作成のための学術論文の報告に向け研究指導を行なう。そのため次の指導を行なう。

1. 論文テーマの問題設定と論点をさらに明確にする。
2. 先行研究の批判的検討を行なう力量をつける。
3. 論文発表のための参考文献と先行研究の整理を行なう。
4. 論文作成の技法についての能力を高める。

授業計画

第1回	学術論文としてのテーマの明確化	第17回	論文の作成・報告
第2回	論文の編別構成の作成	第18回	同上
第3回	論文の構成に応じた報告	第19回	同上
第4回	同上	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	同上	第23回	同上
第8回	同上	第24回	研究発表
第9回	同上	第25回	論文の修正
第10回	同上	第26回	論文の作成と報告
第11回	先行研究の検討	第27回	同上
第12回	必要文献と調査の補強の報告	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	同上	第31回	同上
第16回	研究発表	第32回	博士論文第一回草稿の提出

到達目標

- ・博士論文の第一回草稿の提出。
- ・論文のオリジナリティの明確化。

履修上の注意及び予習・復習

自ら批判的に学術論文を考察する。

評価方法

研究発表の内容及び学術論文を評価する。

テキスト

院生のテーマにそって適宜指示する。

授業概要

学術論文の作成と発表を指導する。この学術論文は、博士論文を提出する前提であるだけでなく、博士論文を構成する重要な論点の一つである。このため、論点の明確化は言うに及ばず、先行研究との関係性を論じることができるように研鑽する必要がある。また、論文構成の妥当性、合理性、そして新規性を意識した研究ができるように指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	学術論文のテーマを明確にする	第1回	論文の作成と報告
第2回	学術論文の構成の作成	第2回	同上
第3回	構成に即しての研究報告	第3回	同上
第4回	同上	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	同上
第7回	同上	第7回	研究の見直し
第8回	同上	第8回	論文の作成と報告
第9回	同上	第9回	同上
第10回	研究の見直し	第10回	同上
第11回	研究の報告	第11回	同上
第12回	同上	第12回	同上
第13回	同上	第13回	同上
第14回	同上	第14回	学術論文の報告と指導
第15回	研究成果の報告	第15回	学術論文の報告と指導

到達目標

作成する学術論文の論理展開と、先行研究との差異を明確に理解することを目的とする。

履修上の注意及び予習・復習

学術論文を作成するための研鑽と報告をすること。

評価方法

作成した学術論文により評価する。

テキスト

研究テーマに即して、適宜指示する。

授業概要

「租税法研究指導Ⅰ」を踏まえて研究指導を行う。租税法研究指導Ⅱにおいては、自己の博士論文テーマについての問題意識を深め、また独自の論点を提示できるように研鑽することが求められる。さらに、租税法研究関連の学会やセミナー等で報告できるレベルの研究成果に対応した研究指導を行う。博士論文は、このような成果の積み重ねの結果として仕上がっていくことを認識できるよう指導する。

なお、2年次においても2本程度の個別研究論文を書き上げることを目標とする。

授業計画

第1回	研究テーマの確認	第17回	研究テーマの確認
第2回	先行研究の報告	第18回	博士論文の目次の確認
第3回	同上	第19回	文献リストの確認
第4回	同上	第20回	先行研究の報告
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	同上
第7回	研究内容の報告（適宜見直し）	第23回	同上
第8回	同上	第24回	研究内容の報告（適宜見直し）
第9回	同上	第25回	同上
第10回	同上	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	同上
第15回	学術論文の報告（1）と指導	第31回	学術論文の報告（3）と指導
第16回	学術論文の報告（2）	第32回	学術論文の報告（4）

到達目標

- ・年間2本の学術論文の執筆

履修上の注意及び予習・復習

- ・毎回、確実に、かつ適切に報告を行うこと。

評価方法

- ・学術論文により評価する。

テキスト

- ・適宜指示する。

授業概要

Iで学んだヘルスケアサービスを取り巻く市場について理解を深める。ヘルスケアコンシューマー行動に影響を及ぼす因子、満足度を規定する要因、情報の公開によるコンシューマーおよびヘルスケアサービス提供機関双方に与える影響、消費者のエンパワメントに必要な要素、意思決定支援について多面的に指導する。保険システムや診療報酬制度などのヘルスケアシステムについても理解を深め、診療機能や規模なども考慮に入れ、ベスト・プラクティスを目指すためのマネジメントについて研究指導する。

授業計画

第1回	ヘルスケアサービス市場の理解	第17回	文献報告
第2回	ヘルスケアコンシューマー行動の理解	第18回	同上
第3回	これまでの学習の整理と研究内容の見直し	第19回	論文作成・報告
第4回	学術論文テーマの明確化	第20回	同上
第5回	学術論文の構成(目次)の作成	第21回	同上
第6回	構成に基づく研究報告	第22回	同上
第7回	研究報告1	第23回	同上
第8回	研究報告2	第24回	同上
第9回	研究報告3	第25回	研究見直し
第10回	研究報告4	第26回	論文作成・報告
第11回	研究報告5	第27回	同上
第12回	ヘルスケアシステムの理解	第28回	同上
第13回	ベスト・プラクティスの理解	第29回	同上
第14回	研究の見直し	第30回	同上
第15回	オリジナリティーについての検討	第31回	同上
第16回	必要文献の補強	第32回	学術論文提出

到達目標

- ・学術論文が作成できる
- ・論文のオリジナリティーを明確にすることができる

履修上の注意及び予習・復習

自らがもっとも関心のあるテーマについて、学術論文としてまとめあげられるようしっかりと研究指導を受けることを求める。

評価方法

作成した学術論文を総合的に評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて適宜指示する。

授業概要

2年次に発表した学術論文草稿を基礎に、先行研究の成果等をさらに広く、深く研究し、博士論文としてオリジナリティを十分明確化し、学術論文としての成果あるものとなるよう研究指導する。博士論文を作成し、その分野の自立した研究者となるよう、学会等で発表できるよう指導する。

授業計画

第1回	論文テーマ論点の再検討・確認	第16回	研究のまとめ・補強
第2回	論文の研究方法の再確認	第17回	論文作成・報告
第3回	先行研究、調査研究の再確認と補強	第18回	論文作成・報告
第4回	研究報告	第19回	論文作成・報告
第5回	研究報告・討論	第20回	論文作成・報告
第6回	研究報告・討論	第21回	論文作成・報告
第7回	研究報告・討論	第22回	中間報告会資料作成
第8回	中間報告会資料作成	第23回	中間報告会資料作成
第9回	博士論文の目次の確定	第24回	論文作成・報告
第10回	論文作成・報告	第25回	論文作成・報告
第11回	論文作成・報告	第26回	論文作成・報告
第12回	論文作成・報告	第27回	論文作成・報告
第13回	論文作成・報告	第28回	論文作成・報告
第14回	論文作成・報告	第29回	残された課題の整理
第15回	論文作成・報告	第30回	論文の提出
		第32回	最終試験準備

到達目標

- ・博士論文の完成
- ・自立した研究者の育成

履修上の注意及び予習・復習

研究に対して積極的かつ、謙虚な姿勢で取り組み、自らで問題分析できるよう研究指導を受けること。

評価方法

中間報告会の内容及び自立した研究者の研究姿勢を評価する。

テキスト

中間報告会の内容及び自立した研究者の研究姿勢を評価する。

授業概要

提出論文を確実に期限までに完成させるため、

- ① 年度前半は、第二稿の修正・補強に当て、
- ② 年度後半には12月初旬までに最終稿を完成させる。
- ③ 最終稿の内容・形式に関して全般的なチェックを行い
- ④ 提出期限までに、「論文」を完成させる

授業計画

第1回	对外発表の結果の検討	第17回	第三次稿の執筆
第2回	同上	第18回	同上
第3回	第二次稿の修正開始	第19回	同上
第4回	第二次稿の修正	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	中間報告会の準備
第7回	同上	第23回	第三次稿のとりまとめ
第8回	中間報告会の準備	第24回	同上
第9回	先行研究・史料面の問題点の確認	第25回	同上
第10回	同上	第26回	同上
第11回	第二稿の修正	第27回	最終稿のとりまとめ
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	論文の完成・提出
第14回	同上	第30回	今後の研究計画の検討
第15回	同上	第31回	最終試験の準備
第16回	論文の目次構成の確認	第32回	同上

到達目標

- ・年度前半で、对外発表と中間報告会での討論を踏まえて、第二次稿を修正・補強し、第16回までに論文の目次構成を決定する。
- ・年度後半には、第三次稿の執筆を進め、中間報告会での討論を踏まえて、第27回までに最終稿を取りまとめ、研究指導者の最終チェックを受けて、提出論文を完成させる

履修上の注意及び予習・復習

- ・自立した研究者としての自覚を持つこと

評価方法

- ・論文作成までの自立した研究者としての姿勢

テキスト

なし

授業概要

年度始めに博士論文作成のタイムスケジュールを設定し、毎月一度「論文進捗の方向性」についてのチェックを行い、毎週一回「論文内容の細部」についての討議を行いながら授業を進める。中間において博士論文のワーキング・ペーパー作成を指導し、内部・外部におけるプレゼンテーションを実施して論文内容のレベルアップを図る。また、必要に応じて指導教員による講義、外部専門家を招聘してのディスカッションなどを行う。

授業計画

第1回	博士論文作成のタイムスケジュールの設定・論文テーマの確定	第17回	論文作成・報告(1)
第2回	論文内容・構成の打ち合わせ(1)	第18回	論文作成・報告(2)
第3回	論文内容・構成の打ち合わせ(2)	第19回	論文作成・報告(3)
第4回	先行研究論文・理論構成の再検討	第20回	論文作成・報告(4)
第5回	実証分析の手法等についての再検討	第21回	論文作成・報告(5)
第6回	ワーキング・ペーパー作成の準備	第22回	中間報告会資料作成(3)
第7回	中間報告会資料作成(1)	第23回	中間報告会資料作成(4)
第8回	中間報告会資料作成(2)	第24回	論文作成・報告(6)
第9回	博士論文の構成の確定	第25回	論文作成・報告(7)
第10回	ワーキング・ペーパーの作成(1)	第26回	論文作成・報告(8)
第11回	ワーキング・ペーパーの作成(2)	第27回	論文作成・報告(9)
第12回	ワーキング・ペーパーの作成(3)	第28回	論文作成・報告(10)
第13回	ワーキング・ペーパーの作成(4)	第29回	博士論文の提出
第14回	ワーキング・ペーパーの報告(1)	第30回	残された課題の整理
第15回	ワーキング・ペーパーの報告(2)	第31回	最終試験準備(1)
第16回	研究のまとめ	第32回	最終試験準備(2)

到達目標

- ・博士論文を完成させる。
- ・研究者としての意識を高める。

履修上の注意及び予習・復習

指導教官との毎週一回の「論文内容の細部」についての討議、毎月一度の「論文進捗の方向性」についてのチェックを意識してタイムスケジュールに従って博士論文の作成を進める。

評価方法

博士論文作成に至るまでの研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

必要に応じて指示する。

授業概要

テーマをさらに発展させ、深化させて、オリジナリティが主張できる成果に向かって研究を進める。中間段階の成果をまとめて研究会や学会に発表する機会を作り、批判的な検討の機会として積極的に利用する。そうした経験を踏まえて、学位論文を完成させていく。

授業計画

第1回	博士論文のテーマの最終的確定	第17回	論文作成・報告
第2回	既発表論文の補強点の明確化	第18回	同上
第3回	必要文献の見直し	第19回	同上
第4回	文献報告	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	中間発表会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	同上
第8回	同上	第24回	論文作成・報告
第9回	博士論文の構成の確定	第25回	同上
第10回	論文作成・報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	論文の提出
第14回	同上	第30回	残された課題の整理
第15回	同上	第31回	最終試験準備
第16回	研究のまとめ	第32回	同上

到達目標

- ・博士論文の作成
- ・研究者としての自立

履修上の注意及び予習・復習

研究・論文の問題点を自ら発見し、修正する姿勢で研究指導を受けること。

評価方法

博士論文作成に至るまでの研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

2年次に発表した学術論文を踏まえ、その内容を深化させるとともに対象範囲を拡大して、博士論文を作成するように指導する。

受講生は、行程表の「論文の構成・章建て」に沿って計画的に博士請求論文の執筆を進める。その際、論文のオリジナリティ（分析手法・分析結果の独自性）と財務会計の理論・制度へのインプリケーション（知的貢献）を明示することに努める。進捗状況を毎週ゼミで報告し、問題があれば、指導教員と打ち合わせて速やかに軌道修正を図る。また、学会やワークショップに参加し、研究成果を逐次公表していく。会計関連学会や大学の機関誌に査読論文を少なくとも一本は掲載することを目指す。

授業計画

第1回	研究の進捗状況の確認	第17回	論文の作成・報告
第2回	博士論文のテーマの確定	第18回	同上
第3回	研究行程表のアップグレード	第19回	同上
第4回	既発表論文の補強点の明確化	第20回	同上
第5回	必要文献の見直し	第21回	同上
第6回	文献報告	第22回	中間報告会用資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	同上
第8回	同上	第24回	論文の作成・報告
第9回	博士論文の構成（章建て）の確定	第25回	同上
第10回	論文の作成・報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	外部研究者を交えた論文の発表会
第12回	同上	第28回	発表会を踏まえた論文の修正
第13回	同上	第29回	博士請求論文の提出
第14回	同上	第30回	残された課題の整理
第15回	同上	第31回	最終試験準備
第16回	研究成果のまとめ	第32回	同上

到達目標

博士論文の作成。

論文にオリジナリティ（分析手法・分析結果の独自性）を付加すること。

財務会計の理論・制度へのインプリケーション（知的貢献）を明示すること。

履修上の注意及び予習・復習

研究の進捗状況を踏まえて、逐次、研究行程表のアップグレードを行うこと。

主体的に問題発見と理論構成に努め、研究者としての自立性を培うこと。

学会やワークショップに積極的に参加し、研究成果を逐次公表していくこと。

評価方法

博士論文作成のプロセスおよび授業への参加姿勢に応じて評価する。

テキスト

受講生の研究テーマに応じて、授業中に適宜指示する。

授業概要

院生は論文執筆の進捗状況を報告し、論文の内的整合性、構成概念の一貫性、論文の理論的貢献、社会的な意義などを考慮したコメントや討論を得て、論文の構成を精緻にし、論理展開を分かりやすくするために、原稿をさらに推敲し、論文原稿第3稿を用意する。その一部を、前年に続いて学内紀要/学術雑誌に投稿、または関連学会で発表する。そこで得たコメントをフィードバックした論文原稿を作成し、より高度な内容で独自性を明確にした学位論文を仕上げる。最終審査に向けた準備する。

授業計画

第1回	博士論文のテーマの最終確定	第17回	論文第3稿の検討
第2回	論文第2稿で補強する論点の検証	第18回	論文最終稿の作成・報告
第3回	参照文献の再検討	第19回	同上
第4回	文献報告	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料の作成	第23回	同上
第8回	同上	第24回	論文最終稿作成・報告
第9回	博士論文の構成(目次)の確定	第25回	同上
第10回	論文第3稿の報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	博士論文の提出
第14回	同上	第30回	提出論文で見た課題
第15回	同上	第31回	最終試験準備
第16回	論文第3稿の提出	第32回	同上

到達目標

- ・博士論文の作成
- ・研究者の自覚と倫理の獲得

履修上の注意及び予習・復習

- ・研究や論文の作成は、高い問題意識をもって、新たな課題を求める

評価方法

- ・研究者としての問題意識、知見の体系に対する姿勢を評価する

テキスト

必要に応じて指示する

授業概要

博士論文の完成のための議論を継続する。博士論文としての水準に到達するためには、テーマ設定が明確かつ有意味であり、その分析の方法論が的確であることを前提として、さらにそれを表現する上での確かな章別構成で論じることが必要である。実際に執筆すると、章別構成の見直しや修正はしばしば必要になるだけでなく、さらに遡って方法論の再検討や先行研究の再整理も必要になるのが一般的なケースである。この作業をおこなうためには教員と受講生との間の原稿をベースとした緊密なコミュニケーションが必要であるので、このコミュニケーションを重視した指導をおこなう。

授業計画

第1回	2年次に執筆された原稿に基づく議論	第17回	博士論文章別構成の見直しと再確認
第2回	2年次に執筆された原稿に基づく議論	第18回	博士論文原稿の執筆と検討
第3回	2年次に執筆された原稿に基づく議論	第19回	博士論文原稿の執筆と検討
第4回	博士論文章別構成の最終確定	第20回	博士論文原稿の執筆と検討
第5回	博士論文原稿の執筆と検討	第21回	博士論文原稿の執筆と検討
第6回	博士論文原稿の執筆と検討	第22回	中間報告会の資料作成
第7回	中間報告会の資料作成	第23回	中間報告会の資料作成
第8回	中間報告会の資料作成	第24回	博士論文原稿の執筆と検討
第9回	中間報告会に基づく再検討、資料収集	第25回	博士論文原稿の執筆と検討
第10回	中間報告会に基づく再検討、資料収集	第26回	博士論文原稿の執筆と検討
第11回	博士論文原稿の執筆と検討	第27回	博士論文原稿の執筆と検討
第12回	博士論文原稿の執筆と検討	第28回	残された課題の整理
第13回	博士論文原稿の執筆と検討	第29回	残された課題の整理
第14回	博士論文原稿の執筆と検討	第30回	論文の完成と提出
第15回	博士論文原稿の執筆と検討	第31回	最終試験準備
第16回	博士論文原稿の執筆と検討	第32回	最終試験準備

到達目標

博士論文の完成

履修上の注意及び予習・復習

現実感覚を大切に研究を心がけること。

評価方法

授業中の報告と研究の進捗によって評価する。

テキスト

学生の研究テーマに応じて指示する。

授業概要

2年次に、発表した学術論文を踏まえ、これを敷衍する形で博士論文を作成するように指導する。博士論文の作成際には、研究の成果がアカデミズムにおいて意味をなすものであることがもっとも重要であり、このためには論文が学術的なオリジナリティを持ち、論文の成果が、既存の研究に対して持つ意味が明確になるように指導する。今後自立した研究者として問題関心を明確にして研究を行い学術的に意味のある論文が作成できるように指導する。

授業計画

第1回	博士論文のテーマの最終的確定	第17回	論文作成・報告
第2回	既発表論文の補強点の明確化	第18回	同上
第3回	必要文献の見直し	第19回	同上
第4回	文献報告	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	同上
第8回	同上	第24回	論文作成・報告
第9回	博士論文の構成（目次）の確定	第25回	同上
第10回	論文作成・報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	論文の提出
第14回	同上	第30回	残された課題の整理
第15回	同上	第31回	最終試験準備
第16回	研究のまとめ	第32回	同上

到達目標

- ・博士論文の作成
- ・研究者としての自立

履修上の注意及び予習・復習

研究・論文の問題点を自ら発見し、修正する姿勢で研究指導を受けること。

評価方法

自立した研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

2年次に提出した博士論文の第一回草稿を基礎にして、先行研究をさらに詳しく検討し、博士論文としてのオリジナリティを重視し、学術論文として完成度の高いものとするように研究指導する。博士論文を作成し、当該分野において自立した研究者として研究できるようにする。そのため学会などで報告できるように指導する。

授業計画

第1回	博士論文のテーマと論点の再確認	第17回	論文の作成と報告
第2回	研究方法の再確認	第18回	同上
第3回	先行研究・調査研究の再確認	第19回	同上
第4回	参考文献などの見直し	第20回	同上
第5回	研究発表	第21回	同上
第6回	同上	第22回	中間報告会の資料の作成
第7回	同上	第23回	同上
第8回	中間報告会の資料の作成	第24回	論文の作成と報告
第9回	博士論文の編別構成の確定	第25回	同上
第10回	論文の作成と報告	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	論文の作成
第14回	同上	第30回	残された課題の整理
第15回	同上	第31回	最終試験の準備
第16回	研究のまとめ	第32回	同上

到達目標

博士論文の完成
研究指導なしに、自らテーマを設定し、分析できて、学術論文を作成できる自立した研究者の育成

履修上の注意及び予習・復習

研究に対して積極的に、しかも謙虚な姿勢で取り組み、みずからで問題の分析ができるように研究指導を受けること。

評価方法

研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

2年次に発表した学術論文を踏まえ、博士論文のテーマと論点を再確認すると共に、先行研究の再確認の下での整理を行い、オリジナリティのある論文が作成できるように指導する。また、この博士論文の作成を通じて得た知見を活かしたさらなる研究に踏み出すことができるよう指導する。

授業計画

<前期>		<後期>	
第1回	博士論文のテーマと論点の再確認	第1回	論文の作成と報告
第2回	論文の研究方法の再確認	第2回	同上
第3回	先行研究の再確認と補強	第3回	同上
第4回	文献報告	第4回	同上
第5回	同上	第5回	同上
第6回	同上	第6回	中間報告会の資料作成
第7回	中間報告会の資料作成	第7回	同上
第8回	中間報告会の資料作成	第8回	論文作成と報告
第9回	博士論文の構成の確定	第9回	同上
第10回	論文作成と報告	第10回	同上
第11回	同上	第11回	同上
第12回	同上	第12回	博士論文の提出
第13回	同上	第13回	残された課題の整理
第14回	同上	第14回	最終試験の準備
第15回	研究のまとめ	第15回	同上

履修上の注意

論文作成の指導のみに頼るとこなく、自主的な研究の取り組みによる研鑽を積み重ねるという姿勢が求められる。

評価方法

博士論文作成に至までの研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

適宜指示する。

授業概要

「特別研究指導Ⅰ」および「特別研究指導Ⅱ」を踏まえて研究指導を行う。3年次においては、先行研究を踏まえつつ独自の論点を提示できる博士論文を完成させることを目標とする。そのためには、早い時期に2本程度の個別研究論文を書き上げることが必要になる。また、論文作成を通じて自立した研究者となるよう指導する。

授業計画

第1回	博士論文の研究テーマの確定	第17回	論文作成・報告
第2回	目次の最終確認	第18回	同上
第3回	文献リストの最終確認	第19回	同上
第4回	論文作成・報告	第20回	同上
第5回	同上	第21回	同上
第6回	同上	第22回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	同上
第8回	同上	第24回	論文作成・報告
第9回	論文作成・報告	第25回	同上
第10回	同上	第26回	同上
第11回	同上	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	論文の提出
第14回	同上	第30回	残された課題の整理
第15回	同上	第31回	最終試験準備
第16回	研究まとめ	第32回	同上

到達目標

- ・博士論文の作成
- ・研究者としての自立

履修上の注意及び予習・復習

- ・自らオリジナリティのある論文の作成に努力すること

評価方法

- ・自立した研究者としての研究姿勢を評価する。

テキスト

- ・適宜指示する。

授業概要

Ⅱまでで学んだ知識をベースに、国際的な視野からヘルスケアサービスの質について学ぶ。ヘルスケアサービスのグローバル化が進むことによる効果、および新たに生じるリスクについても理解を深める。また医療経営に必要なマネジメント能力とはどのようなものかについても総合的に研究指導する。更に、ヘルスケアサービス提供組織は、多職種によるダイバーシティ・マネジメントが求められることについても指導する。第三者評価などヘルスケアサービスの質保証についても理解を深め、質評価の切り口（ストラクチャー・プロセス・アウトカム）および指標について、医療安全も含めて研究指導する。

授業計画

第1回	国際的視野から見たヘルスケアサービスの理解	第17回	論文最終見直し
第2回	海外文献研究1	第18回	論文作成・報告
第3回	海外文献研究2	第19回	同上
第4回	海外文献研究3	第20回	同上
第5回	博士論文テーマの最終決定	第21回	同上
第6回	既発表論文の見直し	第22回	中間報告会資料作成
第7回	中間報告会用資料作成	第23回	同上
第8回	同上	第24回	論文作成・報告
第9回	博士論文の構成（目次）の確定	第25回	同上
第10回	文献リスト作成指導	第26回	同上
第11回	論文作成・報告	第27回	同上
第12回	同上	第28回	同上
第13回	同上	第29回	同上
第14回	同上	第30回	批判的検討
第15回	同上	第31回	論文の提出
第16回	質評価や安全についての理解	第32回	最終試験準備

到達目標

博士論文を完成させる。
グローバルな視点で研究を遂行する能力を身につける。

履修上の注意及び予習・復習

客観的な視点を持つこと、論理的な思考と整理能力を養うよう努力すること。

評価方法

博士論文作成プロセスを通して、論文作成能力を評価する。
研究倫理および研究者としての自立度を評価する。

テキスト

適宜必要に応じて授業内に指示する。